

小説

陽は昇る

ゆとり 満

1

電話で問い合わせてもよい内容であった。しかし、池端は、どうしても直接真紀子に会いたかった。そして、彼女の様子を確かめたかった。忌まわしい事件から既に十日が経っていた。

池端は、午後二時半に彼が勤務する小学校を出た。公務で出かけるので、校長に挨拶をした上であった。その折、校長は「十分に気をつけてください」と、短いながら気遣いのある言葉を、しかも二度までも池端に伝えてきた。「ありがとうございます。気をつけて行って参ります」

池端は、丁寧に言葉を返しながら、校長の言葉がいつもと違うことに気づいた。普段ならば、この程度の挨拶に対しては「はい」と、応えるだけであった。

平素何かにつけても慎重で、規程通り物事を進める校長であった。その言葉を池端は意外に思った。普段表には出さない校長の温情に触れた気がした。彼はありがたく思うと同時に、心が和んだ。

池端が勤務する虹ヶ丘小学校は工場地帯の中にある。四方を道路が走り、その上、学校の真上を高圧電線が通っていた。名称にある「虹」という漢字からほど遠い環境、雰囲気にあった。しかし、学校を東西と南の三方を囲むように植樹された桜が満開になると、実に壮観で、お花見に訪れる地域の人々も多い。その人々の中には「桜が丘小学校」と呼ぶ人さえいた。

ほんの五分も車で走るか走らないうちに国道N号線の山戸藤木バイパスに接続する。このバイパスは産業道路と言ってもよいほどトラックやトレーラーの交通量が多い。朝と夕方には渋滞が激しくなる。しかし、池端が走る時間帯は渋滞時間から外れておりスムーズな車の流れであった。池端は、青葉児童相談所に向かっていた。真紀子の心情を思い遣ると気が重くなってくるのであるが、校務から離れて運転をしていると思うと、気持ちも軽くなっていくのは否めなかった。運転しながら「昭和五十七年ももう終わりか。中曽根内閣が成立しそうだが、組合に対する締め付けが強くなるねばいいがなあ」などと思った。数か所の信号のある交差点でノロノロ運転になってしまったが、四十分

池端は、その言葉に込められているのは校長の気遣いというより、むしろ懸念であることがすぐに理解できた。池端の学級の保護者がつい数日前に不祥事を起こしたばかりである。その上に、学級担任までもが勤務内に自動車事故などを起こしたのではたまらないと、思ったに違いない。もし、そのような事態になったなら、生真面目過ぎるほど生真面目な校長は、地域や保護者に顔向けができないと判断し、出処進退まで考えてしまうだろう。池端は、校長の心情をそう汲み取ったものだから、丁寧な言葉で返したのである。

そんな思いを抱きながら校長室を出ようとする池端に、「報告は明日でよいですから、面談が終わりましたら自宅直行でよろしいです」と、校長は更に言葉をつないできた。

ほどで児童相談所に着いた。池端は門標の所名を確かめると、所内に車を進めた。池端は慎重に運転をした。校長の言葉を思い出したからである。駐車場に車を止め外に出ると、二階建ての相談所は高い他のビルディングに囲まれており、そのせいか二車線の国道を走る車の騒音は間遠く、意外と静かであった。少し古びて見える相談所の建物は十一月の午後の長い影に覆われてひっそりとたたずんでいた。

ドアに書かれていた白いペンキの所名はどこどころ剥げかかっていた。玄関扉のガラス越しに学校にあるような大きな靴箱がデンと置かれているのが見えた。しかし、靴箱にはそれほど多くの靴が納められているわけではない。三和土には色褪せたものや汚れの目立つ小さな靴が散乱していた。

池端はまずその小さな靴を揃えた。揃えながら自身の貸家の小さな玄関を思い出した。やはり彼のところも靴が散乱しているのが常だった。池端には四歳になる男の子と七歳になる女の子がいた。この日は彼の妻が仕事で遅くなるため、池端が保育園と小学校に併設されている児童ホームに長男を、都合がよければ長女を迎えに行くことになっていた。「今日は早めに迎えにいけるかも」と思いながら、立て掛けてあったスリッパを取ろうとした。しかし、池端は一瞬躊躇してしまった。どれも薄っぺらでよれよれのビニール製で、裏底には黒いものがべったりと張り付いてお

り、どれもが片方をもう一方に差し込んだ形に置いてある。池端は仕方なくその中から比較的清潔そうなものを取り出し、そろそろと足を入れた。

事務室の小窓を池端は拳で叩いた。軽く叩いたつもりであつた。しかし、ガラスばかりでなく小窓全体ががたがたと振動した。部屋では、三十前後の女性が池端の息子より一歳ほど年下と思われる男の子を膝の上に乗せて、白衣姿の男性職員と話し合っている姿が見えた。

男の子は眠っているのであらうか、女性の胸の辺りに位置する顔が力なく横に傾き、半開きになった口の端からよだれが垂れ下がっているのがかすかに見えた。両手はだらしと下がったままであつた。女性は、子の腰の周りを支えている両手を時折ずり上げている。彼女の顔は化粧気もなく、土気色めいていた。

ガラス戸の音に女性はびくつとして、顔を向けて来た。それに合わせるようにして男性の職員もこちらを向いた。

そして、池端を認めると軽く頭を下げ、右手を広げて上げ、二、三回押し出すように振った。「少し待って」という合図と池端は理解した。事務室の前を離れ、所在なげに広くもない玄関ロビーの天井や壁面を眺めていた。ポケットに入れた手が小銭に触れた。手が無意識に枚数を数えている。全て十円硬貨ばかりであつた。ぎゅつと握り締めた掌の中の硬貨は五枚だけであつた。ふと池端は男性職員と女性と

自分の懐中を考えてみた。どうにも男性の財布が一番膨らんでいるように思えた。思いながらそんな考えを巡らす自分を情けなく思つた。

事務室の前の狭く短い廊下の突き当たりの部屋から子どもらしいざわめきが聞こえて来た。興味を覚えた池端はその方向に歩を進めていった。ドアを十秒ほど開けると子どもたちのざわめきが大きくなった。目を凝らし、中を窺つた。どうやら屋内運動場のようであつた。広さは小規模の雨天体操場の趣で学校の大きめの教室ほどであつた。絨毯敷きと畳敷きに半分ずつ分かれていた。ガラス越しに中庭に面しているせいか明るく、広々と見えた。二、三歳から十歳ぐらいまでの五人ほどの子どもたちが三輪車に乗ったり、ボールを転がしたりとそれぞれが勝手に遊んでいた。池端は、担任していた真紀子がいるのではないかと子どもたちの姿を追つた。しかし、見当たらなかつた。「具合でも悪いのかな」と不安が過ぎつた。しかし、二日前に訪問のアルバイトを取つたときにはそんな話は全くなかつたので「別室にいるのだろう」と思つた。

「お待たせいたしました。来客中で失礼しました。真紀子の担任の先生でいらつしやいますね」

先ほどの男性職員が、ぼんやりと子どもたちの姿を追っている池端の背後から声を掛けてきた。

「はい、池端でございます。お断りもなしに子どもたちに

に貼り付いていた。

活動を覚えてしまい申し訳ございません。今日はご多用の中お時間をいただきありがとうございます。申し遅れましたが先日お電話をいたしました虹ヶ丘小学校の池端で、月浦真紀子の担任です」

「私は阿部です。先生こそお忙しいのにわざわざおいでくださいましてありがとうございます」

阿部はそういうと軽く頭を下げた。上げた顔に微かに笑みが生かんでいた。池端の几帳面な言葉に「教員らしい」とでも思つたのかも知れない。

「月浦はどちらに・・・」
と言いかけた池端の言葉を広げた手を上げ、制止した。どうやらこの手の動作は阿部の習癖なのだろう。
「月浦は今部屋の方におります。私は主任指導員の阿部和男です。主任指導員と申ししても子どもたちの世話から事務まで何でもやっております。ご存じのように児童相談所は収容児の増加に職員の数が増えつつありますので、相談室で日々です。ただ今、月浦を呼んで参りますので、相談室でお待ちください」

そう言う阿部は玄関口の右側にある部屋に池端を案内した。椅子四脚と長さ四畳ほどの大きめの机の他に部屋には何の装飾もなかつた。固い椅子であつた。椅子に座つたまま池端は無意識に窓の外に目を遣つた。隣接するビルの長い影が駐車場の車を二つに分け、折れて向かい側のビル

池端はこの影の長さに驚いた。着いてまだ三十分も経たないうちに影は思いがけないほど長く伸びていたのである。「秋の日は釣瓶落とし」という諺をしみじみと噛み締めた。池端は真紀子をどう迎えたいのだろうかと思つた。あの日以来もう十日が経っていた。真紀子とは挨拶する間もなく別れたのだった。入学以来六ヶ月が経っていたが、真紀子は池端になつかないままであつた。池端の対応のまささがそうさせてしまったかと思つと、彼はほぞを噛む思いであつた。

窓の外の影はぐいっと延びたように池端には見えた。時間の長さは絶対と思つていたが、相対的でもあるのだと、思わずふーんと納得してしまつた。

「やあ、お待たせしました」
阿部の明るい声に、池端は、はつと我に返つた。扉を開けた阿部の後ろに、真紀子の小さな半身が見えた。頬の赤いのは相変わらずだと、池端は安堵した。が、なんとなく面変わりしたように見えた。気のせいだろうか、あるいは施設に預けられているという先入観のせいだろうか、池端は考えた。

「さあ、池端先生にご挨拶なさい。お忙しいところをわざわざ真紀ちゃんに会いに来てくださったんだから」

阿部は真紀子の背中に手を置いて促した。が、彼女は押

し黙ったままであった。池端は真紀子の池端を見る目に何の感情もこもっていないように思えた。身体の中の力が急に抜けていくような思いに駆られた。その時、池端は「あっ」と思った。真紀子の面変わりが事実で、その原因が分かったのだ。真紀子の長かった髪がぶつとりと切られ、毛先も不揃いのおかっぱスタイルになっていたのである。母親がおればこそその長い髪も毎朝丁寧に梳き、編んでくれたのである。しかし、相談所のような一人の職員が何人もの子どもたちを世話しなければならぬ所では、面倒なこと、繁雑なことは出来るだけ排除することになっているのだろう。

服装も変わっていた。虹ヶ丘小学校に通っていた頃は、流行のデニムのロングスカートなどを着て、上下の色合いなどはいかにも母親好みに統一されていた。今日の前にいる真紀子の服装は、洗いざらしの紺の上衣に下は色褪せたピンクのパンツであった。衣服は自宅から持参して来なかったのだろうか。それとも相談所の内規であり派手な服装は控えさせることになっているのだろうか。池端は真紀子の姿に胸が詰まった。まるで自分の責任であるかのように身の置き所もない思いに駆られるのだった。

「こんにちは、どう元気に過ごしていた」

池端の問いに真紀子は答えず、椅子に座っている足を宙に浮かし、焦点のない目を窓の外に向けたままであった。

関係機関との連絡調整、場合によっては家庭訪問による家庭環境や子どもの保護者の指導、助言まで行う。現在、一時預かりの子どものは、乳児から高校生までの九名になるという。

「申し訳ありませんが突然の相談ケースが発生し、少し申座させていただきます。真紀ちゃん、池端先生とよくお話をしなさいね」

阿部はそう言うと、池端に軽く礼をし、連絡に来た職員と共に部屋を出て行った。

池端の訪問の主たる目的は、真紀子の現状観察と今後の措置を聞くことであったから、真紀子と二人きりになるのはむしろ歓迎であった。しかし、池端の問いに全く答えようともしない子にどう対応すべきか、戸惑ったのは事実であった。そして、教師という肩書がひどく重く感じられた。池端は、話の端緒をどう切り出すべきか、頭を巡らせた。「クラスの友だちからの手紙は届いた？」

池端はクラスの子どもたちに真紀子宛の手紙を書かせ、相談所へ郵送しておいた。五日ほど前であったから、到着しているのは確実なはずであった。しかし、大半の子どもたちは何を書いたらよいか分からず、ありきたりのお見舞

「ようやくこの生活にも慣れて来ましたが、感情の揺れがまだあるようです。気持ちが安定している時はよく話しますがねえ」

阿部は、池端の方を見て気の毒そうな顔をした。

「先生、私の方は別に気にしていません。事情は私にも理解できますので」

そして、小さな声で「両親のことは」と、阿部に問うた。阿部は池端の耳の側に口を寄せてきた。

母親は急になくなり、父親は遠いところへ仕事に行って戻れないと話しました。そうしたらもう両親のことは一言も尋ねません。五歳になる健一という子を可愛がって、よく面倒を見ています。この子は賢い子です」

そう言うと、阿部は目をしばたかせ、天井を見上げた。「こちらの相談所には今、何人ぐらいの子がいるんですか」

阿部の様子を見て池端は話題を変えた。

池端の問いに、阿部は待っていたかのように饒舌にしゃべりだした。

児童相談所には種々ざつたな相談が持ち込まれるという。不登校、いじめ、家庭内暴力、家出などの非行、緘黙症や自閉症などの情緒障害、言語障害などの機能障害、親の家出や蒸発、虐待からの子ども保護など実に多岐にわたる。職員の仕事は保護された子どもの世話や指導、書類の作成、

いや池端の例文を真似したもの、絵を描いたものがほとんどであった。小学一年生の二期期では、まだ文章を綴るということに困難さを持つ児童は多かった。手紙という相手へ自分の心情を表現するなどということは、より難しいのは当然なことであった。

「うん、みんなからのお手紙うれしかったよ」

真紀子が初めてまともに答えた。池端の心が軽くなった。

「由香ちゃんが一番の友だちだったの？」

真紀子の後ろに座っていた由香の手紙が比較的まとまっていたのを思い出し、池端は尋ねた。

「ううん」

「じゃだれが一番の友だちだったの？」

「久美子ちゃん」

真紀子は聞こえるか聞こえないほどのか細い声でそう言うと、恥ずかしそうに俯いた。

池端には意外であった。久美子は、クラスの中でもかなり活発な子で、休み時間を待ちかねて校庭に飛び出し、雲梯や上り棒に登り、男子に混じりドッチボールなどをしていて。いつも教室で折り紙をしている真紀子とは正反対であった。池端の記憶では、真紀子は久美子とはほとんど遊んだりはしていなかったはずだ。

「久美ちゃんとはあまり遊んではいなかったように思うけど」

「学校では遊ばないけど、お家に帰るとよく遊ぶの。久美ちゃんのお家と真紀子のお家は近いから。それに久美ちゃんは真紀子に親切なの。真紀子が男の子にいじめられている時など助けてくれるから」

「そうだったの。先生、よく知らなかった。ごめんね。じゃあ、久美ちゃんに会いたいでしょう」

言って池端はしまったと思つた。真紀子はもう学校に戻ることはあり得なかつたからだ。

「私、もう久美ちゃんとは会えないと思つたから、さよならしてきたの」

真紀子はけろりと答えた。

池端は、自分がどうも構えすぎていると思つた。あるいは真紀子の境遇を悲觀的に見過ぎているのではないかとも思つた。真紀子は池端が思うほどに不幸とは捉えていないし、両親を同時に失つた身の上に失望をしていないのかもしれない。勿論、事件の全てを彼女は知らされてはいないだろうし、そのことが救いとなっているのかも知れない。また、七歳の子なりの才覚を働かせ、事態を悪い方には解釈していないのかもしれない。回りの大人たちが思うほど子どもはひ弱ではない。池端はそんなことを考えると気持ちが悪くなっていった。

「ねえ、お話ばかりじゃ退屈だから向こうの広い部屋に行つて遊ぼう。それと真紀ちゃんの新しいお友だちを紹介し

た。

「ごめん、ごめん。先生がやりたいのを優先して言つてしまった。自分勝手はいけないね。真紀子先生に叱られてしまった」

おどけて池端が頭を搔き、舌をぺろりと出した。

すると、真紀子にはこりと笑顔になった。

「この輪投げがいいわ。健ちゃんが好きなのよ」

「健ちゃんって真紀ちゃんのお友だち」

「うん、そうとも言えるけどそうとも言えないよ」

「真紀ちゃん随分難しい言葉を言えるようになったんだね。すごいよ」

「お姉さんたちから覚えたのかな」

真紀子は褒められてうれいいのか、顔いっぱい喜びが広がっていった。

「健ちゃんね、わたしの、お・と・う・と」

そう言うと、真紀子は池端の真似をしたのだろうか、ちろりと舌を出した。

「健ちゃんを呼んでくるね」

真紀子はそういうと、スキップをしながら部屋を出て行った。

真紀子に手を引かれて来た健一は五歳にしては背が低く、かなり痩せているように見えた。そして池端を見つけると、真紀子の後ろに隠れてしまった。

てよ」

「うん、いいわ」

真紀子は急に生き生きした表情になって池端を見詰める。と、ぴよんと椅子から飛び降りた。

「先生、こつちよ」

声まで弾んでいた。真紀子は、池端を急かすように手を振つた。廊下を歩く足音まで軽やかであった。

今まで真紀子は椅子に座らされ、時によつては堅い話や感情を損ねるような尋問めいたことがあつたのかもしれない。それが一種のトラウマとなつており、池端との会話も「またか」と思い、緊張感を募らせ、そして真紀子を無口にさせたのかもしれない。ところが予想に反し「遊ぼう」と声を掛けられたのである。その瞬間、真紀子の表情が明るくなり、頬にはぼつと赤みが差したのである。その喜びの表情は、これらのことを如実に物語っていると、池端は悟つた。

部屋の隅には畳半分ほどの大きな箱が置いてあつた。見るとそこには様々な玩具が雑然と入つていた。色のはげ落ちたボーリングのピンも幾本があつた。目敏く見つけた池端は、

「真紀ちゃん、ボーリングやろう」と、声を掛けた。

すると、「先生、それはだめよ。健ちゃんができないもの」と、真紀子は池端をたしなめるような口調で応えて来

「健ちゃん、怖がらなくても大丈夫よ。私の担任の先生で、とても優しい先生だから。これから三人で、健ちゃんの好きな輪投げをするのよ」

真紀子の「輪投げをする」という言葉が効いたのだろうか、健一は箱のそばに寄つてくると、ピン五本をあつという間に取り出した。そして、それらを壁際に丁寧に並べた。真紀子が輪を取り出し「さあ、健ちゃんから始めて」声を掛けると、笑顔になった。輪を投げるとピン三本に輪がかかった。池端と真紀子が「健ちゃん上手」と、言いながら拍手をすると健一も拍手をし、笑顔になった。いつの間にか他の子どもたちも寄つて来た。池端は、その子どもたちも遊びに誘つたが、尻込みをしてだれも誘いには乗つては来なかつた。しかし、それでいて立ち去るでもなかつた。池端には彼らに子どもがもつ特有の弾むような活力、生気が薄いような気がした。

「先生、ちよつとお話がございます」

部屋に入って来た阿部が池端を呼んだ。

「先生、帰らないでしょう。まだ帰らないでね」

突然真紀子が血相を変え、叫んで来た。

真紀子のそのただならぬ声に、池端は思わずぎよつとなつた。

「うん、まだ帰らないよ。大丈夫、心配しないで。阿部先生と少しお話をするだけだから」

「本当に大丈夫よね。阿部先生とのお話が終わったらまた遊んでよね」

真紀子の執拗とも思える口調に、池端は異常ささえ感じってしまった。

「本当に大丈夫だよ。ちよつと話をし、終わったらまた健ちゃんも真紀ちゃんと遊ぶから」

池端のその言葉に安心したのだろう。真紀子のきつい表情が見る見るうちに緩んできた。そして、真紀子は健一と再び輪投げに興じていった。

阿部の話によると、真紀子は結局、養護施設に送られることになったという。父方の岩手に住む祖父は七十過ぎであり、わずかの田畑を耕し、かろうじて生計を立てている。祖母は痴呆で施設暮らし。叔父は、三十前半でありながら職が定まらず、叔母は結婚して子が三人である。いずれも真紀子を養育する環境でもなければその意欲もないという。他の縁者も自分たちの生活で手がいっぱいであり、さらに事情が事情だけに誰しも敬遠しているという。

他方、母親の実家は事が事だけに「真紀子を見ると彼女の父親を思い出し、とても養育には自信がないという。それぞれが納得いく理由を持っており、無理強いはできないというのである。そう話す阿部の表情には力がなかった。池端も同じように体から力が抜けていくような気がした。

十二月には山間部にある和泉養護施設に移るといふも

った。かと言って、あれほど真紀子に約束をした手前「もう帰らなければならぬ」という言葉を出すこともためらわれた。

「先生、健ちゃんも待っていたのよ」

池端は絶体絶命の状況に追い詰められた心境であった。池端は腕時計に目を遣った。

「実はね、先生の子どもを保育園に迎えにいかなくちゃならないんだ。先生も真紀ちゃんたちと遊びたいのだがもう時間がなくてね」

「そんなのずるいよ。さつき約束したじゃないの。約束は守って」

池端には随分ときつい言葉であった。しかし、非は池端にある。再び時計を見た。針は四時十五分を指していた。

「分かった、それじゃあの壁の時計の長い針が6の所にくまでね」

真紀子は俯いて考えているようであった。

「本当はもつと遊びたいんだけどいいわ」

そういうと、真紀子は池端の腕を取って健一のいる所へ向かった。

時間はあつと間に過ぎていった。四時四十分に相談所を出たとしても夕方の渋滞が始まっているはずである。それを考えると、保育園到着は五時半を過ぎてしまう。息子の迎えの時刻ぎりぎりである。娘は児童ホームだが、五時に

う一週間もないのだ。七歳の子が施設で暮らし、また新たな人間関係を構築していかねばならないと思ふ。その生活の中で、辛い思いをしなければならぬと思うと、池端は不憫が募っていくのであった。しかし、狭い空間、限られて固定的な人間関係に縛り付けられるような縁者の家庭で養育されるよりは、いいのではないかと池端は思った。それほど遅い時刻とは思っていなかったのに窓から入ってくる日光は急速に淡く、そして暮色を増して来た。先ほどまで西日を受け白く輝いていたビルの壁もその光を失い、寒々と立ち尽くしているように見えた。

真紀子たちがいる部屋に戻った池端はそつとドアを開け、そして、中を窺った。真紀子はまだ健一と輪投げ遊びをしていた。しかし、真紀子の動作には先ほどの活気はなく、むしろ上の空というように見えた。そしてドアの方に心が奪われているように思えた。

池端は細めに開けたドアに力を込めて開けた。すぐさま真紀子が振り返り、視線を向けて来た。

「先生、お話長かったじゃない。私たちすぐ待っていたのよ。続きやろうよ」

そういう言いながら真紀子は池端に走り寄って来た。

しかし、池端は直ぐに真紀子の言葉に同調することができなかつた。思った以上に阿部との話合いが長くなつてしまつて、子どもたちを迎えに行く時間が迫っていたからだ

は一人で自宅に帰っているはずである。いつもより早く息子を迎えに行く予定がむしろ遅くなつてしまつたのである。

池端は焦つてしまつた。

「真紀ちゃんごめん。四時半だよ。もう時間が来てしまつた。迎えに行かなければならない時間なの。本当にごめん」

「先生、まだ明るいじゃないの。ゲームもおもしろくなつて来たのにずるいよ。健ちゃんも先生と遊びたいといつているよ。ねえ、健ちゃん」

真紀子に促された健一は「うん」と言つて頭を上下に振つた。

その時、阿部が部屋に入つて来た。

「真紀ちゃん、池端先生を困らせているんじゃないの。先生はこれから大事な用事があるのよ。また遊びに来てもらえばいいんじゃない」

その言葉に真紀子の表情がぱつと明るくなった。

「じゃあ池端先生、明日来てよ」

池端はいい加減なことを言つて真紀子の心を傷付けてはならないと思つた。

「明日はむりだなあ」

「じゃあ、明後日は」

「明後日も無理かも知れないね」

「先生、それじゃいつ来てくれるの」

真紀子の顔は段々と強ばり、今にも泣き出さんばかりの表情になっていった。

池端は情に流され、出来もしないことを安易に約束してはならないと心を決めた。しかし、目の前の真紀子を見ていると哀れさが募って来た。ここで真紀子の願望を叶えないならば真紀子はどんなに傷つくだろうか、また、人間、教師不信に陥ると思つた。

「池端先生、実は真紀子ちゃんにはだれも面会者が来ないですよ。他の子には母親とか父親とかがきているのです。阿部も困惑の表情であつた。そして池端にそつと耳打ちした。

先ほど、池端が席を外そうとしただけで、真紀子が血相を変えた意味が池端にはようやく理解できた。まだ幼い真紀子の心は、人恋しさに満ち溢れていたのだった。

池端は、校長に再度の訪問を許可してもらおうと考えた。丁度三日後は、金曜日で学年担任たちの打合せがあるだけである。早く切り上げてもらい、二時半頃学校を出れば今日よりは遙かに時間的余裕があるはずである。校長は池端の願いは間違ひなく許可してくれるに違ひない。「じゃあ真紀ちゃんこうしよう。あと三つ寝たら必ず来るよ。今度は絶対に約束は守るから」

真紀子は池端の言葉を反芻しているようだった。そしてホームを出、帰宅する。両親が帰っていなければ自分で鍵を開け、たいがい菓子袋を傍らに置いてテレビを見ている。暗い中でテレビに夢中になっていることもしばしばである。こんな時には「ただ今」と声を掛けても振り向きもせず、食い入るようにテレビに齧り付いている。こんな有様に、池端も妻も注意するのが常であつた。しかし、池端は、真紀子との今日一日を考えると、娘のこの様子も許容されるべきものかと思つた。

部屋の中は朝出たままの雑然とした状態である。台所の流し台には食器や鍋が重なり、布団さえ敷き放しのことがある。夫婦のどちらかが家事専従だったら、こんな状態はないはずである。しかし、妻も池端同様小学校の教員である状況では、これもやむを得ないことなのであつた。こんな訳で、池端の家庭では、帰宅した時点から家庭生活がスタートするとも言えた。

ほつとするのは子どもたちが寝付いた九時前後からである。しかし、その安堵もわずかである。テストやノートの採点や点検、翌日の授業の準備が待っている。池端夫婦は家事、育児、仕事などに連日追いまくられ、身体はクタクタ、気持ちもヨレヨレで、その日をかろうじて送っているという状態である。どこかでゆつくりと休息を取り、身体を休ませるべきなのだが現実がそれを許さない。そんな状態は夫婦二人の心を荒ませ、些細なことでも言い合いが始ま

顔を上げた。

「先生、指切りげんまんよ」

そう言うと、真紀子は彼女の小さく柔らかな小指を池端の小指に絡ませてきた。そして、何度も強く振るのだった。「先生、約束よ。きつとよ」

そう言う真紀子の瞳に熱いものがみるみるうちに膨れ上がり、そしてしずくとなって頬を伝つた。

「寒いから部屋の中になさい」というのに、真紀子は駐車場まで出て来て手を振つた。池端は断腸の思いで車のドアを閉めた。その閉めたドアが、真紀子のか細い腕を挟み切ったかのような錯覚にとらわれた。痛みが胸を走つた。真紀子は車が門を出るまで手を振り続けていた。しかし、車は瞬時にして夕方のラッシュの列に融け込んでしまった。

池端の臉に今別れて来たばかりの真紀子の淋しげな顔と、落ち着きなく動き回っている長男の光太郎の顔とが重なつて来た。この渋滞の様子であると、保育園には五時半は過ぎるだろうと推測した。今日も光太郎は「パパ遅い」と大きな声で叫ぶに違ひない。何のけんみもなく思ったことを口にできるのは幸せなことだと池端は思つた。このような幸せをいつまでも続くようにするのは親の務めと改めて噛み締めた。

二年生になる娘の裕子は授業が終わると、学校の敷地内にある児童ホームで学童保育を受けている。五時になると、時には感情をこじらせ、嫌悪な関係が続く。そのまま気まぐず背中合わせで寝てしまうこともあつた。泥沼の中を這いつくばるような生活だと、情けなく思うこともあつた。しかし、こんな状況は何も池端夫婦だけでなく、共稼ぎの夫婦には多かれ少なかれ起きていることであつた。それでも子どもがいることで、たまの休みの日に公園に行つて遊んだり、車座になつて弁当を広げたりしている時もある。このような時には家庭を持ち、子どもを得たことに無上の喜びを感じるのだった。

ただまれに夫婦とも朝寝坊をし、息子に車の中で食事を摂らせながら保育園に送ることもあつた。また、定時の迎えに遅れて行くと、残っているのは息子一人ということもあつた。泣きながら抱きついて来る息子の不憫さに胸が揺きむしられ、また、暗澹たる思いに駆られることもあつた。それでも夫婦二人で協力すれば、大概の困難は切り抜けて来られた。もし、二人のうちの一人が入院とかの何かしらの事情で育児ができなくなつてしまったなら、たちまち家庭生活は行き詰まつてしまう。そんなことを思うと、真紀子の姿に池端は戦きを覚えるのであつた。

池端は早く気持ちを抑え、車の速度を落とした。夕方のラッシュとは言え、バイパスの流れは順調であつた。池端の車の傍らを他の車が勢よく次から次へと追い越して行つた。なだらかな勾配を上り切ると、その遙か彼方には丘

陵が黒く連なり、その連なりに車の列が吸い込まれて行くように見える。丘陵はブラックホールで無限に車を飲み続けていくかのようであった。まるで異次元の世界がそこに現れ出たかのように池端には思えた。

だれも自分を不幸にしようとして不幸になる者はいない。突発的な外因によることは別にして、人間関係の些細な食い違いの積み重ねが思わぬ結果を招くことがある。途中でそのことに気付いたとしても、渋滞の車列に飲み込まれた車がUターンすることもできず、流れに押されるまま直進せざるを得ないと同じように人も引き返すことができないのかもしれない。

保育園に通じる交差点が視野に入ってきた。渋滞にしてはかなりスムーズに走ってくることできたと池端は安堵した。保育園の近くに味のよいことで知られているケーキ屋があるのを池端は思い出した。子どもたちにケーキを買ってやろうと思った。きっと大喜びするに違いない。そして、今晩は学校の仕事はせず、妻の話にゆっくりと耳を傾けてやろうと思った。信号に差し掛かると、前方の車は順次ブレーキを踏む。そのテールランプがまるで何かを伝えるかのように点滅していた。

2

「おい、知っているか」

入って半年ばかりしか経っていない。まだまだ母親の世話や愛情が必要と考えていた。父親が妻の仕事には反対だったのは当然のことであった。しかし、妻の「一年生になってようやく母親の手が離れた」や「持ち家の資金にする」という意見にうまく反論することができなかった。その分ストレスが溜まり、それは不満、怒りとなり次第に膨張していったのである。ちょうどマグマのように。それを近所の年配の主婦は、まるで見たかのように話したのだ。その主婦の話には出て来なかったが、父親は夜の勤めで客にもてはやされて調子に乗り、見る見るうちに派手になっていく妻に不審を抱いていったのだ。あまつさえ嫉妬まで燃え上がらせていった、ということは容易に領けることである。

恐らくその朝、夫は妻に「夜の仕事を辞めろ」と強く迫ったに違いない。その理由を穏やかに、しかも丁寧に説明したのであれば、大事には至らなかったかもしれない。しかし、口下手でその上、相手の心を斟酌することなど苦手であった夫は、単刀直入でしかも高びしゃなもの言いしかできなかった。

他方、妻は妻で「掃きだめに鶴だ」とか「こんな田舎町にはもつたいない」などという客のお世辞をともに受け取り、有頂天になっていた。つい最近まで主婦であった女性がある甘い言葉に舞い上がったことは容易に

池端が職員室に入るや否や同僚の河野が手に持つ新聞を振りかざしながら声を掛けて来た。

「いや」

その声を聞くや聞かないうちに、河野は新聞を池端の前に広げた。河野が指さす記事はまごうことなく真紀子の両親のことであった。コートを椅子に掛け、椅子に座り込んだ池端は、紙面を何回も読み直した。真紀子の顔が紙面に浮かび、池端は金縛りにあったかのように思考を停止してしまった。押し黙ったままの池端の姿に、河野は罰が悪そうにして何も言わずに自席に戻っていった。

新聞は前日に起きた事件を簡潔に報じていた。惨劇に違いないけれど池端にはあまりに身近な者の出来事のために信じられなかった。というより信じようという気持ちも少しも湧かなかつた。しかし、真紀子の家の近くに住む同僚や校長の話から、それはやはり覆せないような真実であった。

真紀子が登校した後、彼女の両親はいさかいを起こしたのだ。近所の人の話では、ここ一月の間いくども争いの声を聞いていたという。その争いの主因は真紀子の母親の勤め先であった。彼女は最寄りの駅近くのスナックにパートで勤め始めた。もう三ヶ月ほど経っていた。真紀子の父親は腕のよい塗装職人で、収入は並のサラリーマンより多かった。彼にすれば家計に不足はなく、しかも娘は小学校に想像できる。挙句、夫を「つまらない男」と思い始め、心は急速に夫から離れていった。そして、「同じ空気を吸うのも厭だ」と思うほどに夫を疎ましく思うようになっていったのである。事の成り行きとしては当然とも言えた。そこに仲裁したり、妻をたしなめたりする「ときの氏神」の存在がなかったのが不幸だったと言えば不幸だったのである。

「何よ、愚図」とか「つまらん男」とか、男の沽券に関するような言葉を妻は捨て台詞のように投げつけたのかもしれない。それで済めばよかったものをどう弾みか塩を取り、「シツ、シツ」と言いながら夫に投げつけたという。あまりの侮辱に逆上した夫は妻を投げ飛ばし、挙げ句その身体に馬乗りになり、首を締め付けた。恐らく怒りで沸騰していた頭脳は、思考を停止したのである。首を締め付けていた手は限度ということを知らなかったのだ。

池端は、九月に行われた運動会場で参観に来ていた真紀子の両親の姿が、鮮明に思い出された。ほんの四、五分であったが立ち話をした。それは専ら母親とだけであった。父親は軽く会釈をして池端から二歩ほど離れて気恥ずかしそうにしていた。いかにも不器用そうに見えた。しかし、実直で信頼に足る男性には見えた。

母親は高いサンダルを履きピンクのシャツ、そしてジー

ンズの上衣にジーンズのロングスカートであった。父親もそれに合わせてかジーンズのチョッキにジーンズのパンツで、恐らく自分の本意ではなく、妻からのお仕着せなのだろう。

ほんの挨拶ばかりの短い会話であった。その短い会話の中で、

「男は妻に敷かれていた方が家庭は円満に行くようですね」と。

池端はいわずもがなことをしたり顔で言ってしまった。口から出た瞬間から、そして後々に至ってもその言葉を後悔した。なぜそんな言葉が出たのか自身でも理解できないのである。恐らく、気まづそうに傍らに立っていた父親の心を少しでも解きほぐそうと思つたのだらう。それは事件からわずか二ヶ月ほど前のことであつた。その現実には池端は戦きを感じてしまうのであつた。

職員室の中で池端はまるで被害者の親族でもあるような扱ひのされかたであつた。普段あまり言葉を交わさない同僚までそつと寄つて来て「気を落とさないで」などとさも気の毒そうに言う。またある者は「とにかく事後対策を考えなくちゃ」と、まるで捜査本部でも設置せんばかり勢いであつた。

池端はそんな同僚たちに辟易しながらも、次第に平静さを取り戻していった。やはり真紀子のことが気になつた。

教室を覗けば登校しているかどうかはすぐに分かることであつた。しかし、気が重くなり、直ぐに腰を上げることができなかつた。

朝自習の時間が始まるうとしていた。池端はようやく重い腰を上げ教室へ向かつた。低学年の教室棟に近づくにつれ、彼ら特有の甲高い声が教室から漏れて聞こえて来た。廊下の角を疾走した子が飛び出して来て、危うく池端にぶつかりそうになつた。「ごめんなさい」と叫びながら教室へ入つて行つた子の背を眺めながら、池端はいつにない安堵感を覚えた。

池端のクラスに近づくと、入り口ドアから顔だけ出した男子二人ほどが急いで顔を引つ込める。すると、教室から「先生が来た」と叫び声が聞こえて来る。同時に「先生が来た」と唱和する声が教室内に響く。それは恒例のことでいくら注意をしてもなくなならない。「子どもたちの一種の儀式」なのではあるまいか、または「挨拶」なのかと池端は解釈するようになっていた。最近ではその唱和を聞くと、ほつとさえるようになっていた。

「もう朝自習終わるの？」
粘土遊びに夢中になっていた一樹が、不服そうに池端を見上げた。

「大丈夫、まだ時間があるよ」

池端の返事を聞いた一樹は、にこりとしながら粘土を再

び捏ねだした。粘土板の上には見事な親子の犬の姿があつた。集中力があり、器用な一樹は、粘土細工が大好きなのだ。自宅で犬を飼っているせいも、犬の成形が好きで、一年生とは思えないほどの技巧ぶりを發揮していた。

「今日、真紀ちゃんは来ているかな」
空席の真紀子の席を見ながら池端はだれとなしに問うた。「月浦は未だ来てないです。先生」
隣の席の裕太が丁寧な言葉で応えた。

「月浦は今日、来るはずがないよ。だってさ、月浦のおかあさんは殺されたんだから」
紀雄であつた。

「殺されたなんてだれが言つたんだ」
思わず池端はかつとなつてしまった。

池端の不意の怒声に、教室内が瞬時にして静かになつた。池端は、はつとなつた。口を手で塞いたが遅かつた。自制する間もなく突き出た言葉に池端本人も驚いてしまったのだ。いつもごさかしい言葉を振りかざす紀雄の言葉だつただけに、池端はかつとなつてしまったのだつた。

「だつて新聞に出てるっておかあさんが言つたもん」
紀雄も負けていない。クラスの中には紀雄に同調する声もあつた。

「大きな声を出して先生が悪かつた。ごめんね。ただ、真紀ちゃんのおかあさんのことは、まだはつきりしたことが

分らないので、そつとしておいてね」

池端の言葉に紀雄のふくれっ面が収まつてきたようだつた。

静寂はほんの一瞬であつた。教室内は子どもたちのおしゃべりで賑やかになつてしまつた。

「じゃあ、静かに粘土の自習をやつていてね」

これだけを言うと池端は足を引きずるようにして職員室に戻つた。
職員打合せが終わつた後、池端は校長に呼ばれた。校長室はまだ朝の冷気が立ちこもつていた。そのせいもあつてか、謹厳な面立ちの校長の顔が常よりも白く引き締まつていた。

「大変なことが起きてしまいました。既に昨日の夕方、私の方には連絡が入りましたが、先生は丁度出張中でしたので連絡は控えました。子どもは一人でしたね。知り合いの方が預かつているそうです。やはり今日は来てませんか。当然でしょうね。今後の子どもの処遇についてはどうなるか聞いてはおりません。一応、お見舞いがてらに様子を窺いに放課後、月浦さん宅に伺いましょう。とにかく先生は授業、子どもの指導に専念してください」

葉山校長は遣り手と言われる校長らしく、てきはきと池端に指示を与えた。

一時間目の授業が始まつた校舎は、静まり返つていた。

校長室の壁には歴代校長の写真が掲げられている。ぐるりと三方の壁を埋めた額の数が、この学校の古さを物語っていた。いずれも謹厳な表情で、冷え冷えとしたこの部屋に似つかわしかった。池端は校長に深々と一礼をし、姿勢を低くしたまま校長室を出た。そして彼のクラスへと急いだ。静かな校舎の中で彼のクラスだけが賑やかで、歩き回る子どもたちの姿が窓ガラス越しに見えた。

小学生の低学年児童、特に男子は好奇心の塊であるといつて間違いない。そして見つけた対象には、前後左右お構いなしに突進していくという特性がある。猪突猛進という言葉は彼らに用意された言葉と思えるほどである。またおしゃべりが大好きでもある。子どもたちは目一杯活動し、エネルギーを消費する、というより放出する。しかし、彼らは一晩熟睡すると、疲労はきれいに払い拭かれる。見事なほどにである。池端は、既に一年生の担任を二回経験している。彼らのその疲労回復力にはいつも賛嘆し、そして羨望している。

こうした子どもたちには、言葉だけで教育するというのは限界がある。一緒に身体を動かし、触れ合うことがとても大切である。従って池端は、子どもたちとの触れ合いを大切にして来た。休み時間になれば出来るだけ一緒に校庭でボール遊びや相撲、「だるまさんがころんだ」などをして過ごしていた。

つと、そんな言葉が彼の口から漏れた。その言葉に我に返った。立ち上がると真紀子の席に進んだ。そして机の中の箱を引き出した。

カスターネット、ハーモニカ、クレヨン箱、粘土箱、ハサミとかが整然と納められていた。机の横に掛かったジーンズの切れ端で作ったものと思われる手提げの中には、体育着がこれまたきちんと畳まれて入っていた。それを取り出し、机の上に広げると胸ポケットのところに几帳面な字で一年四組月浦真紀子と書いてあった。この筆跡は父親のものだろうか、それとも母親のものだろうか。池端はその名前を指でなぞった。おそらく入学前に書いたに違いない。その時は、間違いなく一人娘の入学の喜びが家中に満ちあふれていただろう。

池端は、物事を見ているようで見てはいないということを知った。体育着の胸のポケットは思いの外小さかった。元々実利のものではない。小さくて当然である。池端の指三本が入る程度ある。袖口も襟首もこんなに細かったのかと思うほどであった。たたみ直した運動着をしまおうとしたら、仄かに洗剤の香が伝わって来た。月浦母子の生活の絆がその香の中になお息づいているように思え、池端は胸を衝かれた。

池端は教師用机の抽出から紙袋を持って来ると、真紀子の持ち物一切を丁寧にしまい込んだ。職員室へ戻ろうとし

今、このような子どもたちの輪の中に真紀子はいない。思い返せば彼女は母親似のぼつてりとした感じの子もだった。授業中は自分から進んで発言するような子ではなかった。無口であったが内向的、消極的な子とも言えなかった。自分と気が合う子とは休み時間などはよくおしゃべりをしていた。給食当番の時などはどの子よりもおかしやべりそうのが上手であった。台拭きもそうであった。一人子であつても、彼女の母親はそのような基本的な生活習慣をきちんとしつけていたのであろう。母親の死、しかもその死をもたらした張本人が父親である。今、その事実を知らないとしても、いずれ知ることになるのは間違いない。その時、彼女は奈落の底に突き落とされ、絶望から立ち上がれなくなるのではないか、池端は気の回し過ぎと思いつつも、そのことを考えると心が痛んだ。西日が差し込む放課後の教室で池端は、両手で顎を支えながら教卓にもたれ、ぼんやりとしていた。

真つ黒でどこどころ青白く光る大きな蠅が一匹、窓ガラスでもがいていた。子どもたちのいない教室内に、その金属的な羽音が響いて来た。後退することを知らない蠅は、上がっては落ち、落ちては上がる動作を執拗なまでに繰り返していた。その単純な動作に池端は視線を奪われた。そして、心が打たれた。

「戻ることを知らないハエ・・・」

何気なく窓の外へ目を遣ると、ハエは相変わらずもがいていた。心なしか動きが鈍くなったようだ。哀れを覚えた池端は、ガラス戸を開けた。乾いた空気がわっと入り込んで来た。池端はその空気の新鮮さに思わず目を瞑った。そして嗅ぐようにして胸一杯に空気を吸い込んだ。目を開けると、ハエが黒い線になって青い空に消えていった。窓際の花壇には鳳仙花が一株咲き遅れた花をまばらにつけていた。痩せ細ったような花ではあるけれど、その花の赤さが池端の目には痛く感じられた。

同じ建て方の貸家が十棟も並ぶ前で、池端は戸惑ってしまった。五月の家庭訪問で一度訪ねて来ているはずなのに迷ってしまったのである。家庭環境調査票を持参すればよかったのだが、自分の記憶を信じ過ぎたのがよくなかったと後悔した。

事件から既に三日過ぎていた。立ち入り禁止の黄色いテープも撤去されていた。池端は校長とPTA会長と一緒に真紀子の自宅へ来たのである。

「この一画であるということが確かならばすぐ分かるでしょう」

同行したPTA会長は悠長に言うと、目の前の家の玄関ドアを叩いた。

細めに開けた奥から、この家の主婦らしき女性が警戒す

るかのようにこちらを覗いた。会長が名乗り、同行の校長と池端を紹介したのだろう。その女性は慌てて衣服を身繕いし、髪に手をやりながらサンダルを引つ掛け、ドアを開いた。そして、池端たちの方に向かって深く札をした。二、三分ほど会長はその主婦と話をした。

「分かりましたよ、この家の後ろの右四軒隣だそうですね」
スーパーの経営者らしく如才なくその主婦に挨拶し、池端たちを促した。

池端と校長はその主婦に挨拶をし、会長の後ろに続いた。不安なげに頬に手を当てた主婦は立ち尽くしたまま、三人をじっと見送っていた。

「ここら辺りはついこの間まで桑畑だったんですよ。それがあつという間に、建て売り住宅やらアパートやら貸家が増えてしまつて、私ら土地の者でも住所番地を言われても分からない始末です。そのお陰で、私らの商売も成り立っているわけですから、ありがたく思わなければいけませんね」

会長の長田の饒舌はつとに有名であつた。

「道路に面した家はいいけれど、見なさい裏手に面する家なんぞは日が差さないでしょう。これじゃ子どもの健康にもよくないですよ。それにしてもずいぶん静かですね。葬式の準備ぐらいはしているはずですから、その物音ぐらひは聞こえそうなものですけど。近所の人はだれも手伝つて

いないのでしょうかね。こういうときにはよそ者たちの集まりというものは冷たいもんですね」
「いや、どうでしょうか。警察からまだ仏さんが戻らないのかもかもしれませんよ」

さすがに校長も会長の多弁には辟易したようであつた。さらに「よそ者」という差別的言葉に嫌悪を催したに違いない。それが表情に現れていた。

放課後、取り敢えずお悔やみがてらに情報収集もしようと、三人が連れ立って来たのであつた。その折に、両親の関係者にでも会えたら子どもの今後の処遇なども尋ねようと、校長と池端は下相談をしていた。

私鉄南関東急行線の走る佐加江市は、近年、ベッドタウンとして急速に人口増加をもたらしている。行政はこの急速な人口増加に十分に対応することができずにいた。特に教育分野においてはその立ち遅れが如実に表れていた。人口増加は当然ながら児童、生徒の増加をも意味する。その増加にまず教室の数が追いつかなかつた。また、子どもたちの中には保護者からの十分な愛情をかけられないままに放任されている子もいた。こういう子の中から非行に走る子もおり、また校内暴力を起こし、教員の手を焼かす子もいた。しかし、これらの現象はエネルギーの発現でもあつた。家庭環境がどんなに劣悪であつたとしても、それが非行の原因とは決めつけることはできない。

このような児童、生徒の指導に情熱を傾ける教師も多かつた。彼らは文字通り寝食を忘れ、子どもたちのために東奔西走していた。
表通りの主婦に教えられた通り奥に入ると、池端の記憶も蘇つた。池端は先導し、玄関先に立った。柱目の板の表札に「月浦」と書かれていた。どうやら手作りのもののようであつた。真紀子の運動着に書いてあつた字に似ていると池端は思った。

「ごめんください」

開いた扉の奥に向かい池端は声を掛けた。一度、二度、三度と声を掛けた。三度目は大声であつた。しかし、その声は家の中を素通りして抜けて行つた。居間と台所、それに六畳の部屋が二間である。それほど広くもない家である。だれかがいたら直ぐに声が届き、返事が返ってくるはずである。玄関から続く台所には冷蔵庫、炊飯器などが並んでいる。洗いざらしの真っ白の布巾が二枚流し場の上に掛けであつた。日常生活が今も厳然として続いているような風景であつた。

「だれもいないんでしょうか」

「そんなことはないでしょう。この通り玄関の扉が開いているんですから」

校長は、会長に確信ありげにきつぱりと答えている。
「部屋を覗いて来ます」

そういうと池端は表に回つた。その時、池端は両隣の家の後ろの家もカーテンが引かれていることに気付いた。最近の主婦は、パート勤めに出ていることが多くなつてきた。PTA役員、特に学級役員を決めるにあたって、このパート勤めを理由に辞退することが多くなつている。池端は、この役員選挙のことから主婦たちのパート勤めの多い実情を知るようになったのである。

恐らく、この貸家に住む多くの主婦もパート勤めなどで家を留守にしているに違いない。あるいは、先ほどの主婦のように、事件のために息を潜めて家の中に閉じ籠もっているのだろうか。いずれにしろ池端は、この貸家界限の静けさの理由が理解できた。

表に回つてみると、畳三枚を横に並べたぐらいの庭の横角には大小取り混ぜた段ボールが雑然と積まれ、一畳程の高さになつていた。その横に真紀子のもと思われる赤い子ども用自転車と、父親のものと思われるスズキ製のバイクが並んで置かれてあつた。

ガラス戸はやはり開け放たれ、畳の部屋が丸見えであつた。その部屋をよく確認もせず池端は玄関側に戻つた。

「いやどうも引越しをしているようです」

「えっ、もう引越し」

会長は、口から外した煙草の煙に目をしばたかかせている。

「これはまた随分と手回しがよいですね。学校に一言連絡がほしかったですね」

「連絡できない事情でもあったのですかね。いずれにしても引越しをしているとすると、親戚の方が来ているのではないのでしょうか」

「池端先生の言うとおりかもしれませんね。少し待ちましょう」

校長が言い終わるか終わらないうちに、表でズンと響くような鈍い音がした。気を利かした池端は、再び表に走った。

二人の男性が大きなタンスを運んでいるところであった。

「月浦さんの親戚の方でしょうか」

「いや運送会社の者です」

グレーのお揃いのジャンパーを着た二人のうち髭の濃い男が、ぶつきらばうに答えた。額や小鼻の辺りにうっすらと汗を浮かべている。

「おたくは・・・」

ぶつきらばうに男の方が質問をしてきた。

「この家の子どもの担任ですけど」

「ああ、学校の先生ですか。それは大変だったですね」

この男性も事情を知つての仕事らしい。

「親類の方でしたら伺いたいことやお話ししたいことがありますので。それなら結構です。どうもご苦労様です」

いだ。

引越し作業もあつてか、部屋は雑然としていた。押し入れの襖は開け放たれ、中の布団類が畳の上に投げ出され、台所の什器類も床に散らばっていた。

茶の間の隅はテレビが置かれてあつたのだろう、その跡が薄青く四角に浮かんでいた。ちょうどその隣に小さなテーブルが置かれ、その上に線香台があつた。崩れて粉々になつた白い灰があつた。

「ここですね」

会長のやや上ずつた声に、校長も池端も頷いた。

「どうぞ」

池端は新聞紙でちやぶ台の前の畳を拭き、二人に向かつて言った。

「会長さんから」という校長の言葉に、会長は辞退することもなく座ると、ポケットからライターを出した。そして不揃いに並んでいる線香三本を掴むと、火を点け台に立てた。青い煙がすうっと立ち上つていった。

池端は急に悲しみに襲われた。涙を堪えようと目をしばたいたが、睫毛に水滴がからまりついた。二人に気取られまいと目を宙に上げ、臉を閉じた。ぼろりと一滴、目頭から頬に伝い落ちた。

外では運送会社の男たちが黙々と荷物を運び、車に積み込んでいく。電車の警笛が微かに聞こえて来た。

池端は頭を下げ、男たちの許を去ろうとした。

「先生、親類の人なら市役所や警察署へ行っていますよ。時間がかかりそうなことを言っていました」

池端を教師と知つてのことか、先ほどの無愛想とは変わり親しそうに声を掛けて来た。

池端も顔を和らげ再び礼をし、校長たちの所に戻った。

「どうも無駄骨だったらしいね」

校長はあらし話が聞こえていたらしい。

「子どもはどうなっているのかな」

会長は、校長と池端のどちらともなく話しかけてきた。

「子どもはもう児童相談所が預かっています。両親とも東北の出身でこちらには親類縁者がいなかったものですから。そうですね、池端先生」

池端は校長の方を向きながらうなずいた。

「そうですね、しかし、何といつても子どもが可哀想ですね。全く気の毒だ。どんなことがあつたか知らないが、何も殺さなくてもよかつたものを」

腕組みをしたまま会長はしきりに地面を蹴っている。三人の間に沈黙が流れた。

「このまま帰るのも子どもの使いみちですので、ちょっと部屋に上がつて、奥さんのご冥福を祈っていきましようか」

会長の言葉に二人は頷いた。そして玄関に入り、靴を脱

目を開けた池端は、壁に貼り付けられた時間割に気付いた。時間割には日曜日の予定はない。曜日の日課が終わると月曜の日課に戻る。だれもがそれを当然のこととして来た。しかし、真紀子の家庭は木曜日に時間割が閉じてしまつた。金、土、日、月と空白が続き、火曜日の今、その空白の確認者のように担任や校長、PTA会長がいるのである。多かれ少なかれ老若男女を問わず、だれしもが時間割は持っているのかもしれない。時間割は人を縛るものでもあるけれど、人はそのことによつて確かな明日を見、そして、掴まえるのかもしれない。

靴を履いて外に出た途端、池端は大きく息を吸った。十一月の乾いた空気が肺の隅々まで行き渡つていくような気がした。しかし、得体のしれない疲労感が身体にへばりついているような気がしてならなかつた。

三人は押し黙つたまま学校へ向かつた。乾燥して片栗粉のような粉塵となつた土が、歩く度にぼつ、ぼつと軽く舞い上がり、三人の靴をうつつすらと白くしていった。

3

襖を開けて身を居間に入れた途端、天井から吊り下げたある洗濯物が池端の顔にべたりと貼り付いて来た。「うえ」と声にもならない声を出しながら目を拳でこしこしとこすつた。目やにが広がるばかりであつた。池端は、四歳

になったばかりの息子の光太郎を寝かしつけていたのだ。昼間の疲労もあってか、彼は光太郎とともに寝込んでしまった。しかし、持参した子どもたちのテストの採点や日記帳の点検のことが彼の脳の片隅にしっかりと根づいていた。その記憶が、池端を眠りから強引に引き離したのだ。無理矢理睡眠から起こされるのは、子どもばかりでなく大人にとっても不愉快なことである。

部屋では妻の淳子がテーブルに新聞を広げ、ボリボリと煎餅をかじっている。テレビもついている。時折テレビにも目を遣っている。小学二年生になる娘の裕子はテーブルの端に算数の問題を置き、窮屈そうにしながら解いている。「光太郎はようやく寝たのね。今日は随分としぶとかったわね」

淳子は新聞から目を離さないままだった。彼女は池端の子煩悩なことをいいことに、寝かし役を彼に任せっきりにしていた。

「保育園で昼寝をし過ぎたのかしら」

池端はべたりと腰を落とした妻の姿にちらりと目をやっただが返事もせず、本棚に置いてあった風呂敷包みを取った。そして、テーブルの上にとざりと置いた。

「あらっ、私、今新聞読んでいるのよ」

「神経の太いのは嫌いだ」

「何か言った？」

「じゃあ、今やっている問題が終わったらベッドに行きなさい」

見かねて池端が仲裁に出る。「分かった」

そういうと、裕子は鉛筆を動かし始めた。池端も採点をし始めた。しかし、三、四枚で意欲がなくなってしまう。妻のバリ、バリという煎餅を噛る音も気になった。さらにパサリパサリという新聞をめくる音も勘にさわって来たこともある。普段なら全く気にしないことでありながら、ささいな感情のほつれが嫌悪感をもたらすことはままあることである。池端は腕組みをしたままごろりと畳の上に寝転がった。とうに眠気は去っていた。天井板のプリントされた板目を数えた。全く同じ模様であった。今まで気がつかなかったのだが、安普請にふさわしい造作であると思った。しかも、すぐに底の割れる疑似性が、住人である池端に共通しているようで気に入った。

裕子は自分の予定の学習が終わえたと見え、さっさと片づけると自分の寝室へと行った。手のかからない子であった。妻もこうであつたらと池端は思った。思いながら苦笑してしまった。話はあべこべである。子が母親に似るということとはあつても、母親が子に似るということはないからである。

テレビではサスペンスドラマが放映されていた。妻はい

妻の言葉に何か挑戦的なニュアンスが感じられ、池端の頭に血が上りかけた。

池端は興奮するとどもる癖がある。しかも、気の弱いところもある。どもりと気の弱さには相関関係があるのかもしれない。それに反し、彼の妻は口達者である。そのことを十分に承知している池端は、妻の領域に入ることを避けている。この時も、池端は、瞬時に押し黙っている方が得策と知った。

「何でもない、ひとりごとだよ」

そう言う風呂敷の包みを開き、テスト用紙をテーブルに出した。

しかし、いつにも増して怒りが止まない。それどころかふつと湧いて来るのだった。池端はじつとその感情を堪えた。少し収まったところで採点を始めた。

「そろそろ寝なさい。もう九時過ぎているわ」

淳子が娘の裕子に声を掛けていた。

「もう少しやりたいの」

裕子は算数の問題に夢中のようなだ。

「勉強より睡眠が大事よ。睡眠は健康の元だから」

「おかあさん、学校の先生でしよう。先生が子どもの勉強を止めるなんて変でしょう」

裕子も負けていない。母親似なのか弁が立ち、しかも負けず嫌いである。

つの間にかテレビに釘付けになっていた。べたりと座り込んだ妻の背中が大きいと、池端は思った。新婚当初はこんなに分厚くはなかった。その背中に埋まったように頭が半分だけ見える。そう見えるのは、池端の低い目の位置によるのかもしれない。

池端はおやと、思った。塗り込んだようにべとりとした髪に、白いものが縮れて見える。じつと目を凝らす。やはり白髪であった。池端は不思議なものをみたような気がした。まだ三四歳である。「それでも」という気がした。同時に妻と二歳上の自分にも白髪があるのだろうか少し淋しい気持ちになった。

池端の胸中にある澱のようなものが急速に溶けていくような気がした。一日の中であるか無しかの息抜きの時間だ、という言葉がふと池端の脳裏に浮かんできたのであった。池端の険しかった表情が急速に和らいでいった。

石油ストーブにかかっているヤカンの注ぎ口から、規則正しい音と蒸気が立ち上がっていた。それはいかにも温もりのある部屋の風情であった。

「あなた、私のことどう思っているの」

テレビの画面に没入しているとはかり思っていた淳子が振り返りもせず、不意に肩越しに声を投げて来た。

突然のことに池端は冷水を浴びせられたような思いだった。そしてはらわたがきゅゅと縮まった。

「私なんか必要ないと思ってるんでしよう」

池端は押し黙ったまま天井板を睨んでいた。

「また始まったと、思っているのね」

淳子は沈黙に抗しきれないというふうが続けた。

淳子の言うように、二人の間でのこの種の会話は今に始まったことではなかった。そして、いつも淳子の口から出た池端の沈黙で終わっていた。

直接の契機は三年前の池端の「失踪事件」であった。非は池端自身にあり、その非を認め、十分に謝罪したつもりでいた。従つてもう済んだことのはずであった。それが何回も蒸し返され非を責められる。それは、丁度治りかけた傷のかさぶたを剥がされるような思いであった。しかし、淳子は納得してくれなかった。

池端は思いかねて、一度拳を振り上げたことがあったが、やはり思い止まった。淳子のペタリと畳に根の生えたような姿と、ねとつくような目の据わりには到底勝ち目がないと、それ以来沈黙を決め込んでいるのだった。

その日、池端はほんの軽い気持ちで家を出た。半日ほど息抜きをしようと思つたのだった。それが思いがけない事態を引き起こしてしまったのだった。

当時、娘は五歳、息子は一歳であった。初めて担任した六年生の卒業式も無事に終えた春休みであった。一月から

三月までそれこそ息のつかないほどの多忙の毎日であった。卒業文集、卒業制作、成績評価、私立中学進学者の内申書の作成、卒業式の練習と。池端は毎日山のような仕事を自宅に持参して行った。その上、池端は教職員組合（通称、日教組）の分会長（学校単位の組合の代表）をも押しつけられていた。折から主任制度問題で組合運動は高揚していた。従つて、分会長会議などで出かけることが多くなっていた。

主任制度とは学年主任、教務主任、保健主任に手当てを付け、主任を職制の中に制度化しようというものであった。日教組側は、職場の管理を強化し、組合組織の分断を図るものとして組織力を挙げて反対運動を展開していた。

これらの諸行事や校務、教育指導の業務をなんとか切り抜け、池端はようやく春休みを迎えたのである。勿論、春休みは児童、生徒の休みであつて教師の休みではない。しかし、授業がない分有給休暇も取りやすく、気分はずっと解放されていた。

妻とも一泊の家族旅行をしようという計画も持ち上がった。そんなある日、池端は無性に海が見たくなつた。

「ちよつと出かける」と、妻に言い置いて車で出かけた。

小田和の海に行こうと思つたのである。池端が釣りや海水浴でよく出かけていた。最近ではバイパス通りができ、自宅から一時間半ほどで行けるようになった。田園の風景は

まだ枯れていたが、西側に連なる山々は心持ち色を濃くしていた。その緑の中に黄金色の実が点在していた。甘夏みかんだ。それらは天地の恵みである。東北育ちの池端には三月のこの時期にこのような豊饒さを目にする事は羨ましくもあり、驚きでもあった。道路はいつしかカーブの多い山間に入っていた。ここを抜けると直に海岸線に出るはずである。思う間もなく山と山の間から青い海が顔を出した。池端は、体内に溜まりに溜まった濁やちりあくたが飛び去って行くような気がした。そして、入れ替わって清澄な空気が身体に満たされていくような快感を覚えた。いつしかスピード計の針が百km/hを超えていた。ハンドルを握る掌がじつとりと汗ばんでいた。池端は、前景を鋭く切り裂くようにして進む車のスピード感に酔っていた。彼の頭の中には神経をきりきりとさせた主任制問題での校長交渉、時間との競争で仕上げた通知票や指導要録記入の焦燥感、そして睡眠を妨げる乳児の泣き声もなかった。あるのはハンドルを通して全身に伝わる車のスピードの快感だけであった。スピードが増すにつれてそれに逆比例するように思考の速さは低下するのだろうか。また、視野は面前にのみ限定されてしまうのだろうか。池端は前方を走る車に急速に近づくとパッシングライトを浴びせていた。池端は海を見るなどという事はきれいさっぱりと忘れてしまつていた。ただ延びる道路をまるで本能の命ずるままのように前へ、

前へと進んで行った。やがて道路は二手に分かれていた。左へ折れば海岸方面、右へ進めば山中である。池端は当初の思惑とは違つて、山々が連なる道へと車を進めた。標高千五百メートルほどの和泉岳を中心に、小高い山々が連なっている。そこには平安の時代から続くという温泉街がある。谷川を挟んでホテル、旅館、保養所などが樹木の中に埋もれるようにして建ち並んでいる。

三月も観光客や湯を楽しむ人々でいっぱいであった。温泉街の入り口に当たる湯元に近づくと渋滞であった。車のスピードを落とした池端は、さすがにほつとした。時計を見ると一時半であった。自宅から二時間もかかっていなかつた。池端は急に空腹を覚えた。しかし、駐車場付きのレストランなどは見つからなかつた。山越えをすれば高速道路につながる。一時間もかからないはずだ。高速道路のインター近くにはファミリーレストランもあるはずだ。そう考えた池端は車を進めた。五分ほど走ると渋滞は嘘のように消えた。谷川の流れに沿って道路が続いている。この峡谷の両側はびっしりと樹木で覆われていた。その樹木の切れたところから青い空が顔を見せていた。木の葉、草の葉、そして道路でさえまるで洗い立てのように清らかであった。「遠くへ行きたい」

歌謡曲の歌詞がふと浮かんで来た。その言葉は、格別の栄養剤でも注入されたように池端の心の中で急速に肥大化

していった。そして、不動のものとなつていった。

「家は、子どもたちはどうする」

「妻に電話をして迎えを頼めばよい。春休みで迎えに行く時間の余裕はあるはずだ」

池端は自分の独りよがりの考えに気付こうともしなかつた。そして、その利己心は極まつた。

「今日は泊まりだ。それぐらい許されるだろう」

池端は久し振りに自分を取り戻したような気がした。しかし、それは歪んだ、醜い手前勝手な心でしかなかった。

淳子はまんじりともせず朝を迎えた。傍らの光太郎が白い顔をして安らかな寝息を立てている。裕子の布団がめくられて、くの字になった足が飛び出していた。寒さの和らいだ朝の空気がひっそりとして動かない。淳子は裕子の布団を直し、立ち上がろうとした。しかし、腰が抜けたようになつて布団の上へべたりと座り込んでしまった。

夫の純一が無断で家を空けたということは、これまで一度もなかった。どちらかというと几帳面な方で、少々の遅れでも必ず電話連絡をくれていた。それだけに「ちよつと出かける」と言つたまま電話一つ寄こさないのはただ事ではないと、淳子は思った。

昨晩は知り合いの二人に連絡を取つた。むやみやたらにあちこちに連絡をして大事になつては、夫の顔を潰すこと陰であることは即座に理解できた。淳子の夫に何事もなかったということになれば、春田の淳子を思つての言葉は反転し、春田を刺す刃となつてしまうからである。春田にすれば、当たり障りのない所に踏みとどまるしかなかつたのだ。

淳子は二人の言葉に不満足とは思つたけれど、彼らの誠意や友情を感じたのは確かであった。しかし、夫の行方が夜半になつても何の手がかりがないことに苛立ち、不満、不安にさいなまれた。「事故、病気でなければ蒸発」という不安が淳子の頭の中で堂々巡りをした。そして、幾度も予想できる事態、可能性を吟味した。しかし、それは無為なことであつた。何の成果ももたらすことはなかつた。ただ頭の芯がすり上げられるような痛みだけが残つた。

「純一のバカヤロー」と何回叫んだことだろう。このこと家に入って来たら向こう脛を二、三回は蹴飛ばしてやらねば気が済むものではない。淳子はそんなことで気を紛らせてもいた。

まんじりともせず朝を迎えた淳子はいつものように朝食の準備に取り掛かつた。幸いなことに娘の裕子はまるで小さい母親のように弟の光太郎の面倒を見てくれた。光太郎も姉にはよくなつき、また言うことを聞いていた。裕子は、この朝は、いつもより熱心に世話を焼いてくれた。幼いながらに彼女は家庭内の異変を感じ取っていたに違

になる。幸い池端の同僚の河野は、かつて淳子の同僚でもあつた。河野は些事にこだわらない豪快な男である。案の定「心配することは無い。明日になれば帰ってくるよ。少し放っておけ」という。淳子の心配なぞ全く念頭にない応答であつた。「ハアツ」という淳子の嘆きが聞こえたのだろうか。河野は淳子を慰めるかのように言葉が続けた。

「もし、事故を起こしたり、遭遇したり、あるいは病気で倒れたりしたらとつくに連絡は来ているよ。日本の警察はただ飯を食つてはいないからな。世界に冠たる日本警察だ。何の連絡もないということは無事であり、ただ単に連絡を忘れたか渋っているかだ。心配しないで」

淳子は河野の説明に頭では納得したが、気持ち的にはストンと胸に落ちて来なかつた。しかし、それを露わにして河野に不満を吐くことはさすがにできなかった。親切心を無にすることになるからであつた。釈然としない気持ちを放っておけない淳子は、再び電話を取つた。

淳子と同じ職場の同僚の春田であつた。彼女は同性、しかも、家庭を持つていてということと淳子に同情して熱心に話を聞いてくれた。しかしながら、男性一般に対する不満や批判で、やはり淳子の不安に対する直接的な答えはなかつた。

それなりに人生経験を積んだ春田にすれば、妻である淳子の言い分に同調してその夫を貶し、悪口を言うことは危ない。「おとうさんは」という言葉すら出さなかつた。淳子は当初、この日は家族皆で過ごす予定であつた。しかし、予定は変更せざるを得なかつた。どんな知らせが入ってくるか分からない。それに対応できるように、子どもたちを保育園に預けることにしたのだ。

その日は地から春が匂つて来るかと思うほどの陽気であつた。アスファルトの道からは陽炎がゆらゆらと立ち上つていた。家々の軒下には色とりどりの洗濯物がまぶしいほどに輝いていた。近くの林からは山から下りてきた鶯の鳴き声が果敢なく聞こえて来た。

家事に取り掛かつた淳子はいつしかだるい体のことも、寝不足でぼんやりしていた頭のことすらすっかり忘れていた。一つ一つの仕事を終える度に部屋の中に外の春の陽気が飛び込んで来て、花を咲かせていくような錯覚にさえとらわれた。

母がしていたように、淳子は新聞紙をひねつてとつぷりと水に浸した。そして、それを軽く絞ると細かくちぎって部屋の床の上にはらまいた。ちぎられた新聞紙がほこりをきれいに吸い取つて床が光を取り戻したように思えた。そして、久し振りに箒を使うといかにも掃除をした気分になつた。その後、畳の部屋に移り、同じようにして掃き、きつく絞つた雑巾で畳を拭いた。こんなに気を入れて掃除をしたのは何ヶ月ぶりだろうか、淳子は頭の中で指を折つ

た。そして、すがすがしく蘇った畳の上で大の字になった。どんなに気持ちよいらうとも思った。

淳子は弾みがついたように体を動かした。真っ白に洗上げた洗濯物を竿に下げる時、一瞬くらくらとなった。久しぶりに輝く太陽の日が強烈過ぎたのだ。淳子は思わず手をかざした。そのかざした指と指の間が透けて深紅に染まっている。夫が結婚前に「きれいだ」と褒めてくれた指の皮膚は仕事や家事で昔の潤いは消えてしまったが、そのすんなりと伸びた形は今も変わらなかった。洗濯物をパンパンと叩いて皺を伸ばすと、淳子はぼんやりと青い空に瞳をやった。名も知らない黒い鳥が青い空を切り裂くように過ぎつて行った。

池端夫婦は教員によくありがちな職場結婚であった。淳子は慎重で、一見気の弱そうな池端が肝心なところで自己の意見を曲げることなく、堂々と述べる態度に好感を持った。しかもその主張は論理的で、丁寧であった。また、算数の実践教育でも優れた成果を挙げていた。従って池端は職場では一目置かれていた。

淳子が新卒で池端の職場に赴任した年であった。池端は彼の加わっている民間の算数サークルに淳子を誘った。また、職場でも何くれとなく親身に世話を焼いてくれた。池端は優しいばかりでなく女性の人格を男性と同等に見ていた。淳子が二十二歳、池端が二十四歳であった。淳子は池

どものはやはり病の時期と重なり、淳子にかかる負担は増加していった。

夫婦はお互いの負担の度合いを理解しあっていた。しかし、わずかの負担の多さが悪感情となつて出現してしまうことはある。確かに妻の淳子に家事、育児の負担が重くなつていたことは池端も承知していた。しかし、その負担を削り、自分が負うということまでは言えなかった。例えば、言つたとしても空手形になることは明明であつたからだ。

悪いことは重なるものである。そのうちに光太郎がインフルエンザに罹患してしまつた。治癒までに最低一週間はかかる。日曜日を除いたとしても六日間は休まなければならぬ。二人で分担すると一人三日間休暇を取らなければならぬ。二月の下旬のことであつた。そろそろ三学期の成績評価が始まる。六年生担任の池端は、評価、卒業式に関わる様々な行事、そして卒業式の練習など息がつけられないほどの忙しさだつた。妻に頼み込んで自分の看病分担を二日間にしてもらった。妻は四日間である。四日間は長い。しかし、これ以外選択肢はなかつた。淳子も同業者ということもあつて、そのことは理解できた。しかし、理性で分かつたとしても、感情が承知しないということは往々にしてある。淳子もそうであつた。負の感情を率直に否とは言えないまま負担として残つた。淳子の負担感はまだで根雪のように感情の底に居着いて、段々と肥大化していった。

端となら結婚してもうまく家庭生活を切り回し、仕事も続けられると確信していった。

淳子が思つたとおり池端は家庭でも協力的であつた。家事や育児も二人は協力してやつていった。教員にありがちな夜間や休日の会合、研究会にも嫌な顔もせず出してくれた。しかし、淳子は結婚生活が長くなるにつれ何か物足りないように思えるようになっていった。二人とも本当のところでは触れ合うことなく過つて来たような気がしてならなかつた。特に子どもが生まれてから、二人でしみじみと語り合うことなどなくなつていった。夫に話したい、聞いてもらいたいという淳子の欲求が満たされることなく、積み積もつてしまつた。その結果が不満として顕在化したのではないかと淳子は思う。この満たされない思いは、長男が生まれてから一層強くなつていった。

幼子にはどうしても通過しなければならぬ病がある。麻疹、風疹、耳下腺炎、インフルエンザなど。その度に夫婦どちらかが仕事を休まなければならない。夫婦共に仕事の忙しさは同じである。しかしながら現実的には女性の方が仕事を犠牲にする頻度が多くなつていく。特に一年生や六年生を担任すると仕事の量ばかりでなく精神的な負担も増加する。比較的五、六年生の担任をすることの多かつた池端は、仕事に時間を取られることが多かつたのである。特に卒業時期を迎える十二月から三月下旬までは、丁度子

しかし、そのことを淳子は元より池端も気づいてはいなかつた。

この光太郎の病気が終えた数日後のことであつた。池端が風呂掃除を失念してしまつた。いざ子どもたちを風呂に入れようとしたら水であつた。普段ならささいなことであつた。笑つて済ますことさえできたはずである。

「ごめん、手が外せなくて。火を点けてくれる」

池端が言つた途端であつた。

「何を、私はあなたの召使いではないのよ。一体何様と思つているのよ」

思いがけない妻の怒気を含んだ言葉遣いに、池端は呆気に取られ、声を失つた。

「あなたと同じ仕事をしているのよ。給料もそんなに違わないわ。家事や育児だつて等分にすべきよ。私が言っているのではないわ。あなたが私に教えてくれたことよ」

一度抜いた栓は、ほとぼしる感情の噴出を止めることは出来ないのだろう。淳子は夫を罵倒し続けた。普段耳にすることのない母親の怒りの声に、光太郎は声を上げて泣き出した。裕子は部屋に隅にうずくまつている。

池端は光太郎を抱き「大丈夫、大丈夫」言いながら頭を撫で続けた。しかし、池端は妻には一言も返すことはなかつた。

目を伏せ、息子を抱きしめている夫を見て、淳子は後悔

した。こんなに追い込むではなかった。しかし、言い出した止まらないのが淳子の性格であった。自分でも分かっていながら自制できないのである。

「夫は疲れていたのではあるまいか。
流れていく白い雲を見ながらつぶやいた。その言葉に淳子はぎくりとなった。そうに違いない。そう思いながらも「疲れているのは何も夫ばかりではないわ。私だってもう疲労困憊よ」

「という反論の言葉がすぐに浮かんで来た。そして、「もし、そんなことで家を飛び出すなんていうことだったら決して許さない。人生の逃亡者よ。妻子のいる者のすることではない」と、強く思うのだった。

久しぶりに隅から隅まで磨き上げられた台所や居間を見て淳子は充実した気分になった。風が流れる部屋はからりとしていた。それに誘われるようにして淳子は畳の上に大の字になった。背中に畳のひんやりした感触が心地よかった。

「よし、今日は純一にステーキをご馳走してやろう」

淳子はわざと太い声で言うと、起き上がった。昨日来の疲労がすつと引いていくような気がした。淳子は今日こそ夫は帰ってくると信じて疑わなかった。

テーブルの上の肉はすっかり冷えて固くなっていた。そ

れを見ていた淳子は、すっかり食欲を無くしてしまっていた。一日中体を動かしていたので空腹なはずであるが、どうしても手が食べ物に伸びていけないのである。時間ばかりが気になってひっきりなしに壁の時計に目があった。

幼子を抱える家庭では、夕食時から、そして子どもたちが眠りに陥る時までが、最も多忙で、慌ただしい。夕食の支度、お風呂の準備、寝床の用意、明日の準備と目白押しである。しかもそうしている間中でも赤ん坊は泣き叫ぶこともあるし、兄弟・姉妹の喧嘩もあるし、授乳もある。

五歳になった娘の裕子は手がかからなくなって来た。むしろ弟光太郎の面倒を見るほどに成長していた。淳子は裕子に光太郎の授乳を頼み食卓を片づけ、入浴の準備をした。本来なら、この子どもたちの入浴は夫の分担であった。そのことを思い出すと淳子の心の中にまた怒りが湧いてきた。食事の片付けを急いで終わらせると、淳子は子どもたちをお風呂に入れた。お風呂場では、裕子と光太郎がお湯の掛け合いを始めた。入浴というより遊びに比重が置かれている。淳子は子どもたちの遊びに付き合う余裕はない。少しでも早く入浴を終わらせかけた。

急かせながら光太郎の体を拭きお風呂場から出す。光太郎は束縛から解放されたかのように廊下を、台所を走り回る。昼間磨き立てた床はたちまち光太郎の濡れた足跡であふれかえってしまう。遊び回る光太郎は、母親の注意など

のお見舞いよ」

そう言うと、春田は包装紙で包まれた平底の四角い箱を淳子に手渡した。

思いがけない来訪、そして心遣いに淳子は臉が熱くなった。

「やっぱりまだ帰っていないのね。いいわよ、お茶なんてもう二日目でしょう。全然音信がないというのはやはり変ね」

淳子は春田を部屋に手招くと、素早く普段着に着替え、お茶の準備のため台所に立った。台所の掛け時計は、七時半を指していた。随分と時間が経過していると思ったのだが、実際はそれほどでもなかったのだ。

「先生のお宅は大丈夫なですか」

淳子はどうしても春田さんと呼べない。日頃から教科指導や児童指導などで助言を得ていることばかりでなく、彼女を尊敬していたので、自然「せんせい」と呼んでしまうのだ。しかし、女子教員の場合、時、場所を問わず「先生」と言い合うことが常ではあったが。

「今は春休みでしょう。彼も娘ものんびりよ。私なんぞでない方がうるさくなくていいくらいよ」

春田の声には春を含んだような勢いきほみがあつて、今の淳子に羨ましかった。

「お茶請けが何もなくて、早速で悪いのですけどこの包み

頂戴します」

「どうぞ、どうぞ、そのつもりだったのだから」

淳子の好物のショートケーキだった。

他人がこんなに心配しているのに、一体、純一はどこをほつつき歩いているのか、そう思うと、淳子の目からははらと涙がこぼれた。

淳子はこの件を青森の実家の母には話してはいなかった。しかし、二晩も帰って来ないとなると、母に来てもらう他ないような気がした。そのことを春田に話した。

「それはもう少し様子を見てからにしてはどうかしら」

「そうね、でもどうしたらいいのかしら」

淳子は、春田の言葉に頷きながらも、不安げに春田を見詰めた。

「私たちだけではどうしようもないわね。川島先生に来ていただくかしら」

春田の言う川島とは、淳子の職場の先輩で、分会長をしている。組合の活動を通し、池端とも面識があった。

「もう寛いでいる時間でしょう。迷惑じゃないの」

「全然、あの人はどうせ夜が遅いし、それに暇に決まっているんだから。あなたの家から近いのも幸いよ。しかもあなたのことをとても心配していたわよ。この際、遠慮なんかしている場合ではないわ」

淳子の言葉に春田はにこやかに答えた。

春田には初対面でもまるで百年来の知己にでもあったような人懐こさを感じさせるところがあった。それは彼女の人徳と言える。また、彼女には男女の区別など最初から存在しない。彼女が職場に限らず、保護者にも男女問わず慕われる由縁がここにあった。従って、川島とも気の置けない間柄であった。

春田の電話に川島は直ぐに同意したのである。ものもの三十秒もたらずに受話器は置かれた。

「川島さんすつ飛んでくるわ。普段でさえゆつくり歩くなんてしないもの」

「主人のことで職場の皆さんにまでご迷惑をお掛けしてすみません」

「米つきバツタみたいにその『申し訳ない』はやめなさいよ」

言われた先からまた淳子が言ったものだから、春田は「全くしようがないわ」と言いながらワハハと笑った。

「おつとと、子どもたちが目を覚ます」

ハンドルを握り、ブレーキを掛ける真似をした春田の姿を見て、思わず淳子は笑みをこぼした。

笑いが笑いを呼んだのだろうか、淳子は上半身をのたうちさせながら笑い転げた。笑いすぎて目尻から涙が滲んできた。しかし、ぱたりと笑いが止まった。悲しみがまた淳子を襲ったのだろう。

「こんな笑いが夫との間にあつたらうか。

若さだけでは説明のつかない溝が、二人の間に出てしまっているような気が淳子にはするのだった。

突然車のエンジンのわめくような音がしたと思うと、鋭いブレーキ音が部屋に届いた。

「全くもういい年こいて、まだ暴走族の真似をしているんだから」

悪口を言いながら春田の目は笑っている。

案の定、川島がドアを叩いたかと思うと、
「なんだ、亭主はまだ帰ってこねえのか」
と、野太い声で叫んだ。

「ちよつと、子どもたちが寝ているからね」

春田は口到人差し指を立てながら小声で注意する。

それが癖なのだろう。川島は汗もかいていないのに額の辺りを手の甲で拭いながら部屋に入って来た。そして、ドスンと春田の隣に座った。

「何よ、いい大人が、挨拶ぐらいきちんとしなさい」

「ほい、これは失礼、川島です。今晚は」

「はい、いつも大変お世話になっております。今夜は折角のお休みのところお出でいただき誠にありがとうございます」

二人は顔を見合わせると吹き出しそうな表情になった。いつも職場で顔を合わせている仲である。今更仰々しい挨拶

挨拶は無用であつたが、やはりこの場では必要なことであつた。何となく座が落ち着いた。

それにしてもと、淳子は思った。二人を見てみるとまるで仲の良い夫婦が掛け合い漫才でもやっているようだった。彼女の気持ちも軽くなつていった。

「あつ、それからご亭主の職場仲間にも電話して置いたから。河野さん、直に見えろと思うよ」

淳子は昨晩河野に電話で相談したことを川島に言うのは気が引けた。しかし、無駄な説明をしなくてもよい人が来ることは歓迎であつた。

夫の職場にはどう連絡したらよいか、ということは淳子には気掛かりなことであつた。不幸中の幸いというべきか、夫が家を出た二十五日の木曜日と二十六日は家庭行事で休暇を取つてあつた。春休みということがあつて、土曜日は日直以外ほとんどの者が休みを取つていた。そのため、夫の「行方不明」の件については彼の管理職に連絡の必要は、取り敢えずなかったのだ。

しかし、事態の如何によつては夫の職場の友人、場合によつては教頭、もしくは校長へ報告しなければならぬことを想定していた。問題はその判断であつた。いつ、如何なる段階で決断すべきかは、淳子には難題であつた。どうしても夫の同僚、それも夫の親しい同僚の判断が欲しかった。それだけに川島の配慮はうれしかった。

「しかしなあ、池端もこんな美人の奥さんをほっといて無責任だよな。あいつは槍のように鋭いところがあるが、それを納める筒というか鞘の要素が足りないんだよな」
「こんなときに人物鑑定などよしなさい。淳子さんの身になつてご覧なさい。夫が無事なのかそうでないのか気が気でないのよ」

しかし、淳子は川島を観察力の鋭い男だと思った。自分が夫に求めていたものはまさしく「鞘たる人間」だったという事に気づかされたのだ。

「僕の勘だけ、彼、ひよっこり帰つて来るんじゃないかな。今頃当人は、まさかこんな大騒動になつていゝとは思つていないかも」

「そうだといいんですけど」

そう言いながら淳子はふうと溜息をついた。

「まっ、あんまり深刻になるんじゃないよ。なんていつたつて親和小学校の男女の各エースが控えているんだから」

「あらっ、エースは一人よ。私のように冷静で頭の回転が良い人と言うんじゃないかしら」

春田はそう言うのと、にっこりとほほえんだ。

淳子は新しくお茶を入れ替えながらこんな風に毎日が送れたら、どんなに楽だろうかと思つた。お茶をつぎ終わると、春田が持参したケーキを川島にも勧めた。川島は「待つてました」と言いながらホークでケーキを切り、それを

口に運んだ。「うまい」という川島の顔に笑いが満ちていた。

「さて、本題に入ろう。ご亭主からの連絡がないのはやはり何かがあったということだろうね」

「何かというとやはり事故かしら。交通事故」

「そうだな、考えられる原因を挙げると、第一に春田さんの言う交通事故を含めた事故、第二に精神的な問題、第三に金銭問題、第四に女性問題だな」

「淳子さんもそのことを言っていたわ。それでどうなの」

春田は珍しく川島を急かしている。

「淳子さんはご主人の女性関係、金銭関係については否定されたとのこと。それは妻として当然であり、大事なことです。しかし、淳子さんには辛いことかもしれません。真相は分かりません。ここはあくまでも冷静に、客観的に究明していく必要がありますね。それで、池端さんの同僚である河野さんに来ていただくようお願いした訳です。春田さんも知つてのとおり、河野さんは人格者です。四十そこそこですが、職場ばかりでなく地域からの信頼も厚い。彼なら池端さんの情報を私たちより持つていゝと思います」
噂をすれば影がさすの諺どおり、当の河野が玄関のドアを叩いて来た。

「やっぱりねえ。心配していたんですよ」

河野の開口一番であった。

彼の話によると、池端は精神的に相当参つていた様子だったという。ただでさえ三月は教師たちにとって疲労の深まる時期だ。まして、卒業生を担任していればなおさらである。その上と、河野は額に皺を寄せて言うのである。それは職場の人間関係であった。

「もし、池端さんが失踪されたとなりますと、その責任の大半は私たちにありますよ」

河野は姿勢を崩さず淳子に頭を軽く下げた。

それは主任制問題と絡んでいた。池端は分解長として日教祖本部の指令である「主任制度絶対阻止、ストライキを辞さず」の方針で、職場の分会をまとめようとしていた。

しかし、教員たちにとつて「ストライキ」は重い決断を要し、なかなか決心のつかないことであった。それは池端にしたとしても同様であった。しかし、生真面目な池端は上部機関の決定を分会においても賛成多数で決めたがつていたのだ。分会会議は終始重苦しい雰囲気にも包まれて終了した。ほとんど意見も出さず、池端の説得を受け入れる形で決定したのであった。

ところがその後、教務主任とそれに追隨する何人かの者たちにより、スト反対の多数化工作が行われた。同時に池端を排斥する策動も行われた。池端にすればはらわたの煮えくりかえるような思いであった。しかし、十歳も二十歳も年上の先輩たちである。その上確たる証拠もないのに面

と向かつて抗議などできようがなかつたのである。このような軋轢は人間関係を分断し、職場を暗くする。その責さえ池端は自分にあると思つていた節があると言う。しかし、失踪するほどまで悩んでいたとは思ひもなかったと、河野は言うのである。ただ、浮いた話や金銭上のトラブルについては一切ない、断言できると、河野は初めて頬を緩めた。そして膝を崩した。

淳子も女性関係や金銭上のトラブルは夫にはない、と信じていた。が、やはり河野の話聞いてほつとするのであった。しかしながら、それほど職場のことで問題を抱えていたならば、少しは妻に打ち明けてほしかった。楽しいことだけでなく苦しいときこそ相談しあつてこそ夫婦の絆は強まるのではないかと、不満が湧いてくるのであった。

「河野先生の言われたストの件は我が分会でもやはり暗い影を落としてしまつてね。日教祖本部からの指令でやむなく従っている組合員が大部分であることは現実です。それだけに、ちよつとした圧力で脱落する組合員も出て来る訳です。こうなりますと、スト派と脱スト派の対立が明確になり、職場までも活気を失つてしまいますから。幸い後ろでスト崩しなどをする人たちはいません。が、しかし、ストが実行されればされたとして処分とか、管理職との対立など深刻な後遺症を残すのも事実です。若い池端さんであれば悩みが深くなるのは理解できますね」

「今、川島先生がおっしゃられたことはその通りで、一番心配しているのは精神的な面ですね。まさかとは思いますが、やはり事態を深刻に考えて対処した方がよいかもしれませんね」

座の雰囲気为重くなった。

「対処ってどんなこと」

春田も心配そうな声で川島に顔を向けた。

「取り敢えず家出人の搜索願か」

「少しオーバーじゃないの」

「いや、ここは川島先生のおっしゃる通りですよ」

河野も川島に同意する。

「でもね、教師の家出人搜索願なんてかっこ悪いじゃん」

春田は先刻の強気とは一転し優柔である。気が強そうに見えて情に脆いのが春田の良いところでもあり欠点でもあった。しかし、その脆さも彼女に人が寄る要因でもあった。「春田女史の意見を考慮し、搜索願は明日にするか」

河野も大きく頷いている。

三人が腰を浮かせる様子を見て、淳子は急に心細くなった。不安で居ても立っても居られない気持ちだったのが、川島や河野のだらかさと精神力の強さ、そして春田の優しさで明るさに救われていたのだ。急に去られるのは突然の停電に襲われたも同然だと、暗澹たる思いに駆られるのだった。しかし、時刻は十一時になろうとしていた。三人と

も家庭持ちである。引き留めることはできなかった。

その時であった。電話のベルが部屋に響いた。淳子は一瞬息が止まり、身体が固まってしまった。背筋を悪寒が走った。

「淳子さん、電話よ」

春田に言われて身体の縛りが取れた。腕を伸ばし受話器を取った。三人の視線が淳子の持つ受話器に集中した。

淳子は受話器を取った。耳に当てて何か頷く。そして聞き返している。声がわずかにふるえている。また聞き返している。

一同が淳子の声に聞き耳を立てている。

「え、とおうまのどちらですか」

「十馬まで行っていたのか」

川島がつぶやく。

「上田警察署。それで、ええ、主人に間違いありません。けがは、はあ、入院している。はい、小さい子がおりまして、もう電車もありませんので明日迎えに参ります」

涙声になって受話器を置いた淳子の肩が、細かに震えている。淳子の顔がゆがみ、大粒の涙が両の瞳からあふれ出して来た。そして、テーブルの上に突っ伏した。押し殺したような鈍い声が出た。

「ねえ、淳子さん。ご主人大丈夫だったのね」

春田が淳子の背中をさすりながら尋ねた。

淳子はゆっくりと顔を上げ、そして手で涙を拭った。淳子がハンカチを差し出した。

「ありがとう」と言いながらハンカチを取り、目、顔を丁寧に拭いた。朱を差したような表情が少し収まって行く。

「ええ、けがをして入院をしているけど命には別状がないんですって。上田警察署、十馬半島のね。そこからの電話だったの」

そして、淳子はもう一度顔を拭くにつこりと笑った。白磁のような肌理の細かい肌に戻っていた。三人はほっとした風情であった。

「しかしまあ、十馬の方まで行っていたんじゃないから探しても見つからないわけだ。これで所在がはっきりし、命にも別状ないということは万、万歳だな」

そういうと川島は両手を上げた。いつもの剽軽な川島に戻っていた。

「十馬半島の上田病院ね。それじゃ日帰りは無理かもね。子どもたちは私が見ていて上げるから心配しないで行ってらっしゃい」

春田の申し出に淳子はまた目頭を熱くするのだった。

「上田なら日帰りできるよ」

「あらっ、河野先生十馬方面詳しいのね」

「うん、実は釣りで年に四、五回は行っているんだ」

「そうだったの。それで何時間ぐらいで行けるの」

「そうだね、田原で乗り換えてそこから上田線の特急に乗れば総計で三時間半ぐらいだよ」

「まあ、意外と近いのね。七時ぐらいの電車で行けば夕方四時頃までには帰って来れるのね」

春田の言葉に淳子もうれしそうに「よかったわ」と同調した。

「ところでけがの原因は何だったのですか」

河野の問いは、川島も春田も聞きたいことであった。

「気が動転してしまいましたので詳細は聞き漏らしましたが、どうも崖から落ちたらしいのです。しかし、けがはたいしたことないらしいので、ほっとはしております。入院も大事をとってのことらしいです」

「それはよかった」

川島もほっとした表情で頷くように首を二、三回上下に振った。春田も河野もほころんだ表情だった。

「皆さんには本当にご心配やご助言をいただき助かりました。私ひとりでは何もできず、うろろろするばかりだったでしょう」

淳子は深々と頭を垂れた。

淳子が頭を上げたときであった。

「これね、必要じゃないかと持参したんですよ。明日、早い出立でしたら銀行は開いてませんかから」

河野は封筒を淳子に差し出した。

「銀行」という言葉、そして封筒に、淳子は一瞬にして理解した。

「河野先生、それはいただけません。とてもとても申し訳なくて」

「いや、差し上げるといふことではございません。緊急事態に池端先生の友人としてご用立てしたということですから」

「いやあ、さすが河野先生ですね。民間会社でご苦労された経験が、こういう場面でも發揮されるんですね。淳子さん『緊急事態』ですからありがたくお借りしたら」

川島の言葉に淳子の懸念や遠慮は消え去っていった。

警察署の担当者との会話の中で「入院」とか「転落」という言葉を聞いたときに、その「費用は」ということが頭を過ぎったのは確かであった。手持ちには当座の家計費しかなかった。河野の封筒にどれほどの金額のお金が入っているか定かではないが、淳子にとってはまさに「千天の慈雨」であり、「地獄で仏」と言っても言い過ぎではなかった。

「余計なことかもしれないませんが、警察署には何か手土産を持参された方がよろしいかも」

河野の言葉に淳子は一瞬ぼかんとしてしまった。そこまですぐに人を遣うのだと、驚きが先に走った。

よく「教員は社会音痴」とか「世間知らず」とか評され

それが段々に快感となつていった。

名の知られた温泉地温海を過ぎると、線路は緩やかに左へカーブしていく。そして、入りくんだ山の絶壁がそのまま海に落ち込んでいく。その海岸線には大小の岩石が散らばり、繰り返して波が押し寄せ、引いていく。岩石を打った波は砕け、裂ける。そして白い波頭はしぶきとなって散っていく。淳子はそれが海の呼吸のように、また叫びのように感じられた。

線路は巧みに平坦地を見つけ進んでいく。短いトンネルがいくつも続く。そのトンネルを出る度に海の景色が新しくなっていくように淳子には思えた。海が変身しているのか、それとも見ている自分の位置の変化によるのかと、淳子は自問した。

「目の位置」と言葉が浮かんだ。淳子は「そうか」と合点がいった。自分たち夫婦は似たもの同士なのかも知れない。それだけに同じ見方しかできないのではないだろうか。物事が全て順調にいつているときには問題や支障は出て来ない。しかし、一旦二人の意見が食い違つて来ると、その相違を許容出来ず、互いの欠点を際限なくあげつらう。結果、蟻地獄に落ちた蟻のように、いつまでもがき続ける始末となつてしまうのだ。

淳子は海の色を眺めながらしきりに自分たち夫婦の有り様に考えを巡らした。

る。大学卒業しての二十代そこそこで「先生」と尊称され、また民間企業のような激烈な利益獲得競争に晒されることなく過ごす。世間の評はあながち間違つてはいない。それは淳子もよく承知していることであつた。それだけに河野の微に入り、細にわたる心遣いには驚嘆してしまつた。「何から何までご心配やらご配慮をいただきまして誠にありがとうございます。ご厚意に甘えさせていただきます」

淳子は両手を上げ、押しいただいた。

表通りを走る車の音も間遠くなつていった。急に寒さが緩んだせいかわ、夜気の冷たさはそれほどでもなかつた。電車の走る音が微かに届いて来た。

4

淳子が乗車した特急「十馬」の4号車車内は、土曜日ということもあつてか満席に近かつた。家族連れや学生たちのグループに混じつて一目で新婚と分かるカップルもいた。皆楽しそうに会話し、笑い声も聞こえた。

私鉄で田原駅まで来てJR十馬線に乗り換えた淳子にとつて、特急の車内は居心地の良いものではなかつた。何か自分が異邦人のような気がした。窓から見える海は少し白波がたつていた。列車が進むにつれ、青い海原の透明度は増し、空と海を区切る水平線が定規で引いたようにくつきりと見えた。淳子は心が吸い取られていくような気がした。

「何故お互いがお互いの心に頼れないのだろうか。この度の夫のことだつてそうだ。職場の同僚から聞いて初めて夫の苦悩を知る。こんなのは本当の夫婦じゃない。少なくとも私は彼の心に入り込もう、入り込もうと努力をし、全てを話してきた。だが、彼は違つていた。私の話をまともに聞いてくれようという意思は見えなかつた。疲れているからか、それとも会話の必要性はないと判断しているのか。家族は、あるいは夫婦は一体何で繋がっているのだろうか。「血の繋がりに」などと言うものは観念でしかない。まして夫婦間には血縁など存在しない。結局、夫婦お互いが日々努力をし、理解を深めていくしかないのではないか。夫婦お互いが朝、職場に行き、子どもは保育園、学校へ行く。そして夕方一緒にいる。それだけだつたら家庭というのは単なる集会所あるいは器でしかない。

「夫婦お互いがお互いの向こうに理想郷や安息地を求めようとしているのなら、そんな夫婦は蜃気楼の夫婦でしかない。私たちはそんな夫婦になつてしまつてきているのだろうか。混み合う乗客に混じつて上田駅を降りた淳子は、やはり自分ひとりだけ場違いのような気がした。心なしか日の光も濃い。淳子は改札口の上に掛かる丸い時計を見上げた。

十時五十分であつた。七時に家を出たのだから所要時間は三時間五十分であつた。河野の言つた通りであつた。駅から吐き出された旅行者は皆嬉々として見

えた。事故を起こし、入院している夫の着替えて一杯のカーバンを抱えているのは自分だけだろうと思うと、淳子は気が益々落ち込んでいくのだった。

朝食を摂らずに出た淳子だった。空腹を覚えた。「食事」ということよりも、春田に預けて来た裕子と光太郎を思い出した。出る間際、光太郎は少しぐずった。しかし、保育園に通園しているせいか、母親と離れることの抵抗は少なく、直ぐに機嫌を直した。春田とは幾度も接触している顔なじみであったことも幸いしたのだろう。裕子にはけがをした父親を迎えに行く、と説明したら納得した。普段から聞き分けのよい子である。「ありがたい」と淳子は娘に感謝した。まだ昼食には早いのに、客引きが幾人も歩道に出て客を誘っていた。それを見ていると淳子は食欲がしぼんでいった。

淳子は駅前案内板の前に立った。案内板を見ると警察署は近かった。駅の雑踏を離れて横道に入った。その通りは地元の人々のための商店街らしく、八百屋、魚屋、肉屋などが並んでいた。その先には数店の銀行が見えた。時間が時間だけに人通りは少なかった。淳子はようやく一人になった、とほっとした気分になった。

「私も旅行者になりたい」

淳子にとってその思いは渴きにも似たものであることに気づいてはいなかった。

淳子は丸山に親近感を覚えた。見ず知らずの地、しかもただでさえ緊張を要する警察署で、木訥とも思える年配の警察官が担当であることに、幸先の良さを感じた。

丸山警察官の話は概ね次のようであった。

午後四時頃石橋岬から上田に向かう途中、池端は運転を誤ってガードレールを突き破り、十メートルもある崖下に墜落、車は大破してしまっただ。幸いシートベルトを装着していたため奇跡的に軽傷で済んだという。ところが、崖下から道路まで這い上がるまで二時間近くもかかったという。事故での額の傷と崖を這い上がる途中で、腕や足など至る所に擦過傷を負ったという。血の流れ具合で大変な傷と取られた。その上、泥まみれときている。そんな姿で近所の家に駆け込んで救いを求めたものだから、その家の人たちはびびくりしたのは当然だった。すぐ救急車の手配をし、病院に担ぎ込まれた次第だという。救急車と病院から警察署に連絡が入り、現場検証と尋問が行われた。その結果、単純な自損行為に過ぎないことが判明し、遅い時間だったのが自宅に連絡したという。

「しかし、奥さん、あの車はもう諦めた方がいいね。とても修理で収まるような代物ではないよ。それにガードレールの修理費、クレーン車とレッカー車代も馬鹿にならないね。でも対物保険や車輛保険に入っていれば無料ですむけどな」

警察署内に入るとひんやりとした感じを受けた。淳子は改めて外の陽気を知った。三月下旬なのに気温は二十五度を超えている。十馬の気候の良さが淳子にはうれしかった。

受付らしきところに若い婦警の姿を見て、淳子はほっとした。姓名を名乗り、事情を話すと、担当の警察官の所へと案内してくれた。婦警は歩きながら「遠い所からで大変でしたね」とねぎらってくれた。淳子は思いもしなかった優しい言葉に驚いてしまった。免許証の更新手続きぐらいいでしか警察署などには行ったことのない淳子である。建物を見た瞬間から胸がドキドキしていた。それが、署内に入った途端に出会ったのが、親切な婦人警察官であった。担当の警察官は、だいぶ髪の薄くなった五十を過ぎたと思われる丸山という男性であった。小太りで温厚そうであった。無帽で弾帯をはずしていた。淳子には警察官というより消防士のように見えた。消防士と思ったら淳子の緊張が少しほぐれた。

「いやあ、奥さん遠いところからご苦労様です。全く内助の功とはありがたいですね。奥さんも働いていると聞いていますから、外助になりますか」

まるで自分に言い聞かせるような低い声であった。表現に理解し難いことがあったが、淳子をいたわっていることは言葉の調子、その表情からも伝わって来た。

「えっ、何ですって対物も車輛も入っているって。しかもJAF（注1）にも入っているって。奥さんそれはラッキーだね。それだったら出費はごくわずかで済むね」

しかし、淳子は警察官の言葉に軽く頷いただけであった。出費が少ないにしても各方面への連絡、事務手続きなど雑なことが襲ってくるはずである。しかも、使い物にならない車のローンは残ったままである。単純に喜んではいらなかったのである。

「それに主人は運がよかったですね。運がよいというより強運の持ち主ですよ。つい三日ほど前に同じような事故があり、乗っていた三人全員が死んでいます。全く奇跡というほかないですよ。しっかりと掴んでおれば、そのご利益は奥さんにも回ってきますよ」

鼻に掛かったメガネの奥の目玉を落ち着かなくまばたきしながら、丸山警察官は池端のことをしきりに持ち上げるのだった。

淳子は、丸山の口の両端にたまった白い粟粒を見ながら、夫の身体より費用の心配をしている心を見透かされたのかしらと、内心ぎくりとした。しかし、今日にも夫が退院できると聞いて、淳子がうれしくないはずはなかった。

淳子は、持って来た手焼き煎餅の包みを丸山警察官の前に差し出した。警察官は困惑の表情を浮かべながら断って来た。しかし、淳子は無理矢理警察官の腕の中に置くと、深

々とお辞儀をした。署を出た淳子は、一連の厄介ごとを警察官に託したような気持ちになり、気分が軽くなった。ほつとした淳子の頬に、磯の香を含んだ風が柔らかく当たってきた。淳子は、歴史を持つ名高い港町に來ていることにようやく気づいた。やはり緊張が続いていたのだと、改めて知った。

警察署から病院までは五分もかからなかった。淳子は、二日も夫と会わなかったのは初めてであった。六年生の修学旅行で家を空けるのは実質一日半である。どんな言葉を掛けたらよいのだろうと、ふと思った。「こんにちは」では他人行儀であるし、「元気」と言えば皮肉にも聞こえるかもしれない。「意外とむずかしい」など、思わず苦笑してしまった。

玄関の扉を押して中に入った。靴箱の横には薄っぺらなビニール製のスリッパが雑然と立て掛けてあった。その薄汚れた様に淳子は怯んだ。しかし、そろりと足を入れた。淳子の意志というより足が拒絶するように固まってしまった。受付で挨拶をし、病室を尋ねた。三階だということ。

「三階のどちらですか」

淳子の問いに、

「三階のナースステイションで聞いてください」

四十をとつくに過ぎたと思われる女性が抑揚のない声で応えて来た。

淳子は突き放すように言った。そして、夫のペースに乗るまいと心を固くした。

「春田先生にはご迷惑を掛けてしまったね。手土産を買っていかなくちゃ」

「何太平極楽なことを言っているのよ。みんながどんなに心配したか少しも分かっているのね、あなたは」

言おうとしながらぐつとその言葉を飲み込んだ。しかし、感情は抑えることができなかった。不機嫌な表情になっていくのが手に取るように分かった。

「まっ、今回の件は本当に悪かった」

夫にとっては謝罪の言葉なのだろう。しかし、淳子にはいかにも能天気な言葉に聞こえた。

「どうして連絡をくれなかったの」

抑えていた怒りが吹き出た。それでも他の入院患者の耳には届かないように声を押さえた。

「そのことについては後でゆっくり説明するから、とにかくナースステイションに行つて退院手続きを取つて来て。それと着替えありがとうね」

池端は、淳子の持つて来た旅行カバンの膨らみ具合を目ざとく見つけていたのだろう。

「お願いだから」

手を合わせて哀願するのだった。

今まで見たことも聞いたこともない夫の姿であった。そ

淳子は、ペタリペタリとスリッパの音を響かせながらナースステイションで聞いた三〇五号室の前に立った。人ひとりが入れるほどに開いたドアをノックした。「どうぞ」という声に部屋に入った。すると「おう」と言いながらドア際の男が手を上げた。上げた手も、頭も包帯で包まれていた。

「夫だ」

驚きはなかった。まるで他人を見るような平静な気持ちであるのが淳子には意外であった。先ほどの懸念はまるで杞憂であった。

「わざわざ来てくれてありがとう。警察から電話がいたのでびっくりしただろう。こんなに大きさに包帯をしているけど、たいしたことはない。安心してくれ。もう退院できんだよ。保険証持つて来てくれたね」

滅多に見せない饒舌な話しぶりに淳子は舌打ちをした。「安心してくれ」なんていうセリフには腹立たしささえ覚えた。また、たつた二晩にしろ二人の子を抱えどんなに切ない思いをしたのか、さらに友人たちにも迷惑をかけてしまった状況をこの男はちつとも理解していないのだ。腹立たしさを通り越え、情けなくなってしまうのだった。

淳子は、内心そう思いながらも、必死に冷静さを保とうとした。

「子どもは私の職場の春田先生にお願いして来たのよ」

これまでされるとさすがに淳子も従わざるを得なかった。

淳子が病室を出るのを待っていたかのように、

「やつぱり奥さん怒っていたな。ここはひたすら謝るしかないな」

と、池端の隣のベッドの男は笑いながら言つて来た。

「それしか方法はありませんね」

池端は渋い顔で答えた。池端は事の顛末を同室の連中は話し済みであった。包帯姿を見れば誰しもその原因を尋ねてくる。説明せざるを得なかったのだ。

「それにしても軽はずみなことをしてしまった。しかも転落事故まで起こしてしまった。これは全く余計なことであった」と、池端は天井を仰ぎ、深く嘆息した。

事故の後始末は全てJAFと保険会社に任せることで話がついていた。事故車は修理不能で新車に替えてくれることになった。また、その間はレンタカーが無料で貸し出されるという。池端は保険のありがたさを感じた。両社の担当者からは「人身事故でないのが不幸中の幸いですよ」と、幾度も慰めの言葉を受けた。池端もそのことは骨身に沁みて分かった。

「後は時間が解決してくれますから。あつという間ですよ」

JAFの三十前後と思われる担当者は、池端を力づけてくれた。その言葉が池端にはありがたく、そして忘れられ

なかった。

「私は恥のかき通しよ」

「ごめん、ごめん」

池端としては平身低頭で通す以外、方法はなかった。明るく外気の中で見ると、池端の顔には青あざがあちこちに見られ。やはり相当のダメージがあったに違いなかった。腕の包帯は外したとは言え、頭部に巻いた包帯はまだ外せなかった。

帰りの車中は意外に空いていた。池端夫婦たちが座った海岸側の座席の周りは空席が目立った。しかし、池端の包帯姿はお客たちの注目を集めるには十分であった。

「お金は足りた？」

池端は遠慮がちに聞いた。淳子は返事をせず、車窓の景色に視線を置いたままであった。

河野の配慮で金銭の支出はしのげた。しかし、今このことを夫に説明する段階ではないことをさすがに淳子も理解していた。

沈黙に耐えられなかったのは池端のほうであった。

「泉州寺に泊まった晩、家に電話しようと思っていただけ、つい飲み過ぎてそのまま寝込んでしまったんだよ」

泉州寺は十馬半島の数ある温泉地の中でも名湯と景観のすばらしさで名高かった。

「別になんか不満はないよ。きみと子どもさえいてくれれば十分だよ」

「でもね、あなたには家族があるのよ。独身とは違うのよ。一体家族のことをどう考えているのかしら」

「言葉は全く理にかなっているのだ。」

「いつもそうなのよね。自分に不都合になるとだんまりを決め込むんだから。何か不満があるのならはっきりと断ってちょうだい」

「別に不満はないよ。きみと子どもさえいてくれれば十分だよ」

池端は数十秒の沈黙の後によく口を開いた。

「だったらどうしてひとりで旅行をしたのよ」

淳子の追及は蒸し返しで、しかも、夫を苦しめて袋小路に閉じ込めようとしているだけなのではないかと、池端は苦々しい気持ちになっていくのだった。しかし、それを口にするれば妻の怒りの炎に油を注ぐことは目に見えていた。

「旅行などという気持ちはさらさらなかったよ。ただつい流れてそうなってしまった。その点は本当に悪かった。謝ります」

「そんな便利なことってあるかしら。そういうのを自分勝手、エゴイズムって言うのではない。そんな論理が通らないことは子どもだって知っているわ。無責任の極みね」

「そこまで言われるとさすがに池端は怒りを覚え、捨て鉢

「私、どんなに心配したかしれないわ。それに子どもの世話やら家事やらで大変だったんだから。それに引き替えあなたは・全く、どんなつもりだったの」

池端は、今更隠し立てはできないと覚悟を決めていた。とにかく一通りのことを話さねばならないと思いつながら、乗車したのだった。その話の切っ掛けを掴むのに三十分近くも時間を要したのだった。

「そのことは本当に申し訳ない。旅館から電話しようと思いつながらつい後になり、ずるずると引き延ばしをしているうちに事故を起こしてしまった」

「旅館、旅館と言いますけど、あなた本当にひとりだったの」

「それは絶対に保証するよ。なんなら松屋旅館に聞いてくてもいいよ」

「でもね、どうして泉州寺温泉まで行ったのよ。家族旅行だって田舎へ帰省するくらいで全然やっていないのに。あなただけひとりいい思いをしたのね」

「いや、なんとなく運転していたら泉州寺まで行ってしまいい、ちようど夕刻だったものだから・・・」

「よくお金があったものね。確かあなたのお小遣いはそんなになかったはずよ。それに随分と都合良く泉州寺に行き着いたものね。前から計画していたんじゃないの」

「信じてくれ、本当に偶然だし、成り行きだったのだよ。」

な気持ちにさえなるのであった。しかし、非は己にあると思うと、やはり堪えるのであった。

「そんなに責められても答えは同じだよ。人間魔が差すってことあるじゃないか。ちよつと気が緩んできたことが、思わぬ重大事に至るってこと。言い訳がましいが、今回のことは確かに重大な結果だったが、動機はごくささいなことだったといえるよ。ただひとりになりたいだけだったんだ。とにかく疲れていたんだよ」

「ほら、やっぱり理由があったんじゃない。結局、私から逃げたかったんでしょ」

その言葉が口から出た瞬間、淳子は後悔した。九死に一生を得た夫を追い詰めし過ぎた、と思ったのである。「窮鼠猫を囓む」という例えもある。自暴自棄になって全てを捨てさせる気持ちにさせるのは、淳子の本意ではなかった。退路を作るなり、軟着陸できる場所なりを保障しておけばよかったと思うであった。何事も一本調子で追及する余裕のなさ、自分の大きな欠陥であると、彼女は常々反省していた。今回も自分の短所が、しかも大事なところで出てしまったと後悔するのだった。

「きみから逃げる？そんなことじゃないよ。男にはどうしてもひとりになりたい時があるんだよ」

淳子は夫の「男」という言葉にカチンと来てしまった。「相手の思いも汲み取る」というような考えは瞬時に吹き

「相手の思いも汲み取る」というような考えは瞬時に吹き

飛んでしまった。

「いつから村田英雄になったのよ」

「なに？」

「義理と人情を看板にする演歌歌手よ。男女平等、民主主義を標榜している日教組の活動家がいつから浪花節を標榜するようになったの。それとも浪花節が民主主義の半てんを着ていたのかしら」

心なしか淳子の顔には朱が差していた。

池端は自分に落ち度があったとは言え、あまりにひどい妻の言い様だと思った。周りに乗客がいなかったのは幸いであつた。見ず知らぬ乗客と言えども聞いてもらいたくない夫婦喧嘩の内容であつたからである。

池端は、妻の罵詈雑言にも等しい言葉を奥歯をぐいと噛み締め、窓の外の霞んだ島影を見ているだけであつた。

池端は事故の当日朝、重い心のまま泉州寺温泉旅館を出た。自宅に「連絡せねば」という気持ちが強くなるのに、公衆電話へまでには足が進まなかつた。「途中ですればよい」と、自分の心を納得させながら肥田に抜けた。泉州寺から肥田までは山の中であつた。肥田は静かな湾が格好の海水浴場となつていた。勿論、この時期は海水浴客は皆無であつたが、砂浜を散策している若者たちの姿が見られた行き違う車は少なく、連なる山々には桜が白い模様のように

に点在していた。肥田から十馬半島の突端、石橋岬を抜け、上田を通り帰途に就こうと考えていた。石橋岬までは海岸に沿つての道が延々と続く。池端にとつて初めての道であつた。道路地図で確認するとカーブの連続であつた。「慎重に運転して行こう」と、池端はつぶやいた。肥田と石橋岬の中間地点に崎波町があり、商店街や銀行、役場などが立ち並びこの地域一番の繁華街であつた。海岸に向かう矢印をつけたトイレの看板があり、池端は右折して向かつた。それは小さな公園の一角にあつた。細かな砂浜が海に続いていた。海は穏やかで潮を含んだ海風が爽快であつた。女子大生風の二人連れがベンチに腰を下ろしていた。池端が用を済ませ波打ち際まで行こうとしたら、先ほどの二人連れが池端の方に寄つて来て、「おじさん、写真撮つてくれませんか」と声を掛けて来た。それをきつかけに池端は彼女たちと会話を始めた。話してから彼女たちが教育学部の三年生で、しかも卒業後は、小学校の教員になることが希望ということが分かつた。池端が現役の小学校教員であるという、話が盛り上がり、気が付くと一時間以上も話し込んでいた。池端は急ぎ話を切り上げ、石橋岬へと向かつた。崎波を過ぎて右折した。この先からはカーブの連続であつた。しかも幅員は狭く、自ずとスピードは抑えて運転をした。時間が経過するにつれ穏やかであつた海は白波が目立つようになり、風も強く、冷たくなつていった。石橋岬で

は日は没していた。しかし、まだ水平線辺りは淡い茜色に染まつており、夕闇を感じさせることはなかつた。池端はその残照を右に見ながら運転をしていた。空腹が急に押し寄せて来た。昼食も摂らずに運転をしていたのだ。時計を見るともう四時であつた。池端は焦つた。これでは自宅到着は九時近くになる。食堂などに寄る暇はない。幸い途中で購入したお結びがあつた。その包みからを一個取り出し、歯にくわえて裂き、前方を注視しながら運転を続けた。

石橋から上田に行くのには二つのコースがある。一つは石橋の手前で左折する。国道として整備され、道幅も広い。ただし、山間部を縫うように道路は走っている。もう一つは半島の突端を通り、海岸沿いに進む道である。こちらは道も狭く、しかもカーブが連続する。池端の頭にはなぜか「石橋岬」の言葉が強く刻み込まれ、何も考えることなく海岸通りの道を選んでいたのだ。この夕刻から夜に移る時間帯は、視界がはっきりしない危険時間帯である。事故も多い。運転に最も神経を集中させなければならぬ時間帯であり、道路であつた。

一個のお結びが腹を満たすのではなく、さらに空腹を覚めさせた。池端はグレーの視界に目が慣れたと過信したのかもしれない。スピードも上げていた。残りのお結びをまた取り出し、包みを引きちぎり、がぶりとお結びにむしゃぶりついた。

その時であつた。突然前方の崖の縁から白い物体が飛び出して来た。池端は思いつきりハンドルを左に切つた。今度白いガードレールが迫つて来た。迫つているというより眼前に立ち塞がっていた。蹴とばすようにブレーキを踏んだ。金属的なブレーキ音などは何も聞こえず、ガッシーンというまるで爆発音のような音がし、車は宙を飛んでいった。池端が記憶していたのはそこまでであつた。

「ガードレールを突き破り」という局面で、彼の人生は暗転したかもしれない。しかし、幸運が彼を救つた。彼の車は、松の太木が三本折り重なるように生えている所にまるで誘われるように落下したのであつた。おあつらえ向きに、幾重にも重なつた松の枝木のクッションが手を広げ、待つていて、彼の車を抱きかかえるように受け止めてくれたのだ。さらに、彼はしっかりとシートベルトをし、そのシートベルトが最大に機能してくれたのであつた。問題は崖下から道路まで這い上がることであつた。この時間帯は車の交通量は極端に少なくなつていた。歩行者は皆無と言つてよかつた。その上、車はガードレールとガードレールの間をすり抜けるようにして落下している。事故の痕跡がほとんどなかつたのである。そのような有様であつたから例え通行人がいたとしても気づかなかつたに違いない。従つて池端はけがをした身で、しかも独力で上の道路まで這い上がるしかなかつた。出血と泥まみれの身体はだれが

見ても瀕死の状態にしか見えなかっただろう。

池端はこの遭難の有様こそ妻に聞いてもらい、少しばかりの慰めをほしかつたのである。ところが妻は夫の災厄など歯牙にもかけず、むしろ悪者扱いである。しかし、この池端の気持ちが見えれば、また大ごとになるのは必定であろう。淳子にすればそれはあまりに手前勝手に過ぎるし、自己愛の何物でもないと思うだろう。

池端には向かい合って座っている妻が、ぐんぐん遠ざかっていくような気がした。それは何も初めてのことではなかった。口論の果て、冷えた体を背中合わせに臥せた夜半は一度や二度ではなかった。それは、己の精気が闇の深淵に向かい急速に吸い寄せられ、同時に妻の存在が宇宙の果てに消え去っていくような恐ろしい光景とでも言えた。

同衾しながら夫婦それぞれが全く別な想いを抱いているという事実、それが互いに感じ取れるということは、この上ない冷やかさであると言えよう。

恋焦がれて一緒になった男女の心に荒涼たる風景が吹きすさぶのは、地獄の責め苦を見るようで、とても耐えられないはずであろう。だが、人の心には鬼さえも平気で棲ませるといふ。その寒々とした光景を思うと、池端は暗澹たる思いに駆られていくのであった。

いつしか電車の中は汗ばむほどの暖かさになっていた。しかし、車内とは打って変わり、車窓から見える海原は白

波が立ち、岸に寄せる波頭は激しく泡立っていた。

5

学校は冬休みに入り、新年を迎えていた。四日、池端は日直当番のため出勤していた。この日、転校した月浦真紀子の書類作成を行う予定でいた。

真紀子が児童相談所から和泉養護施設に移ってから一月ほど経っていた。和泉養護施設は田原駅から和泉岳方面に向かつて七キロほどの所にある。真紀子が保護されていた児童相談所の管内にも養護施設があったのだが、そこは収容児童数を超えており、入所できなかったのである。近年この傾向は強まっていた。特に大都市圏ではひどかった。そんなわけで真紀子は県境に近い養護施設に入所となってしまったのである。

転校して来た児童を受け入れた学校は、転出先の学校へ転入学の通知書というものを送付する。転校して来たことの証明書でもある。その通知書に基づいて転出校は関係書類を作成し、転入校へ送付する。書類には児童の指導要録の写し、児童・生徒歯の検査票、児童・生徒健康診断票などである。

池端は、和泉小学校からの通知書を十二月半ばに受領していたのだったが、二学期の成績作成など仕事が重なり関係書類作成が遅れていたのだ。

指導要録の表は、校名、校長と担任氏名欄、学籍の記録、出欠の記録に分かれている。裏面は、各教科の学習の記録、特別活動の記録、行動及び性格の記録などの欄がある。

夏休み前に作成したばかりの指導要録の裏面は、氏名欄にゴム印の氏名が押されているだけであった。「ピカピカの一年生」というけれど、書類も真新しい。それに字を入れた時、新雪に足跡を付けたような軽い興奮と、緊張感を覚えたのを池端は思い出した。

学校によつてはコピーした表裏を糊付けして送つてよこすところもあったが、池端の学校にはまだコピーの機器が備わっていなかった。従つて、別紙にペン字、ゴム印を用いて写すのである。六年生の児童の要録を写すとすると結構大変である。五ないし六年間の記録を間違わずに写しとらなければならぬ。しかし、真紀子の場合是一年生だから、裏面には氏名以外何も書いていない。表の欄にしても出欠席日数以外は全てゴム印の押印で事足りた。ところが転学の事由の欄で、池端ははたと言葉に詰まってしまった。用意されている「保護者の転居」のゴム印は使えないのである。そればかりでない。どんな理由を書いたらよいかかなかなか浮かばなかったのである。

指導要録は、戦前学簿簿と言われた。二十年間保存の義務があり、部外秘となっている。ところが往々にしてその

情報が外部に漏れることがある。池端が真紀子の転出の理由にこだわるのはそのような事情を知っていたからであった。また、依然として差別問題が存在していた。学籍簿にあった国籍や本籍の記入が指導要録からなくなったのはその差別問題が背景にあった。成績の評定は相対評価である。多くの教員たちが悩むのがこの相対評価である。池端もそのうちの一人であった。三学期末、指導要録記入を行う。その時には学習の評定、行動の評定項目を記述する。

日頃、多くの教師は「人間は生まれながらにして平等であり、差別をしてはならない」と、説いている。しかし、「この相対評価は子どもたちにランク付けをし、差別、選別することであり、結局、言っていることとやっていることとは矛盾しているのではないか」という疑心暗鬼が生じ、それに悩まされるということである。

そんな悩みは青い、実社会は競争が常態であり、そこには常に評価が付きものである。学校も社会の一構成員であるのであるから競争という分野があつて当然で、何も悩む必要はない。また、熾烈な競争社会にいきなり放り出されるより、学校時代から慣れておいたほうがよい、という反論も一概には否定できない。それだけに、まじめな池端などは余計に悩むのであった。

新年四日は仕事始めでもある。街はにわかには活気づいてくる。しかし、学校はまだ冬休みが続いていることもあつ

て、訪れる者はほとんどない。校内は森閑としていて校庭にも子どもの姿がない。やはり学校というものは子どもが居ての存在だと言うことをしみじみと感じる時でもある。池端が受け持つ低学年子どもたちの発する金属音に似た甲高い声は、時に苦痛を感じる時もあったが、ないと無性に恋しくなるものであった。

池端はリズムカルな音を立てて蒸気を噴く石油ストーブの上のヤカンに見入っていた。その蒸気の音に身体ごと引きずり込まれそうな感覚に、はっとなって我に返った。その瞬間、「母死亡」という文字が脳裏に浮かんで来た。そして思わず「これだ」と小さい声で叫んだ。

改めてペンを握り直すと「転学の事由」欄に「母死亡のため」と丁寧に書き入れた。そして、まだ乾ききっていない文字にふうつと息を吹きかけた。つやのある柔らかな文字は、見る間に硬質な紙の白さに同化していった。その白さに目を取られながら和泉は寒いだらうなど、真紀子のことを思い遣った。

新しい生活が真紀子に再び始まっていた。施設の収容年限は基本、高校卒業までという。十八歳までである。真紀子は現在七歳であるから、もし期限一杯まで在籍するとなると、十一年間過ごすことになる。人格形成に最も重要な時期をこの施設で暮らす。池端は彼女が緑豊かな環境にうまく適応し、成長することを願わずにはいられなかった。

比較的新しい右手の棟の二階に事務所があった。階段の途中で出会った赤いトレーニングパンツの保母さんが「こんにちは」と、明るく笑顔を投げ掛けてきた。事務室で来訪の意を伝えると、主任児童指導員の野地さんがこれまた笑顔で近寄って来て「こんにちは」と大きな声で挨拶をした。「来客には笑顔で挨拶」という園の方針が徹底しているようで、池端は「学ばねば」と強く思った。「ご苦勞様です。待つておりました。部屋に案内しましょう」と、池端を先導した。

「この棟は管理棟と幼児棟で、学童棟は向かいになっています」

歩きながら説明をした。飾り気のない人柄で目が澄んでおり、若々しい情熱が感じられた。

「学童棟は建設以来二十年近く経っていますから、あちこち傷みが目立っています。なかなか予算がつかず困っています」

池端は野地が言う通りだと思った。内部も古びた感じが強かった。

「今月の目標 ことばづかいをいねいにしよう」というスローガンが、廊下の掲示板に貼ってあった。低学年の子たちも読めるように、漢字には振り仮名が振ってあった。しかも子どもの字であった。「子どもの主体性」を重んじる教育方針が窺われた。

池端は、養護施設に入所した真紀子のことを考えているうちに、同じような境遇の光男のことを思い出した。光男は、池端が最初に赴任した学校で担任した子であった。丸顔に大きな目が少しばかり淋しげで、気に掛かっていた。しかし、行動はエネルギーで、腕白盛りの三年生たちの中でも取り分け活動的であった。

両親が離婚し、父親の手で育てられていたが、経済的な理由と男手での育児に行き詰まり、施設に預けられていた。父親がたまに会いに来ていた。そういう点では肉親から全く見捨てられたような子に比べ、幸せだったかもしれない。青志学園は学区の西端に位置するところにあつた。南関東急行鉄道播磨駅裏にあたる。深く切り込んだ谷、地元の人たちが谷戸と呼んできた縁に建物はある。鉄筋コンクリートの二階建てが二棟である。春ともなると、芽吹いた緑と桜の花に彩られ、なんとも牧歌的な景色である。

池端が家庭訪問で訪れた時、すでに桜は散っていたが、その代わり様々な濃度の緑が谷を埋めていた。二日ほど続いた雨が、葉に潤いと活気を与えたのだろう。葉は陽光にきらめいていた。そして、学園はまるで緑の雲海の中に浮いているようであった。頬に当たる風が爽やかで心地よかつた。建物に近づくとペランダには洗濯物や布団が所狭しと干されていた。晴れ間を待つていたに違いない。

子どもたちの居室が並ぶ薄暗い中廊下の突き当たり、ガラス張りの部屋があつた。ガラガラと戸を開けると長机があり、その周りに折り畳み椅子が十脚ほど置いてあつた。「担当の佐々木先生を呼んで来ますので、座つてお待ちください」

そう言うと、野地は椅子を池端の前に開いた。

部屋から出て行く野地の油気のない頭髮が踊っていた。六畳ほどの部屋の中には飾り物とてない。ただテレビが置いてあつた。部屋の入り口には職員室と札があつた。職員は休憩室にもなっているのだろう。池端はそう考えた。「池端先生ご苦勞様です。光男を担当しております佐々木です」

野地の隣に、やはりトレーニングウェア姿の二十代後半と思われる女性が笑顔で立っていた。

「初めまして、光男君の担任の池端です。本日はお忙しい中、お時間を作っていただきありがとうございます」

池端は立ち上がると、丁寧に挨拶をした。

「それでは、私はこれで失礼します」

野地は、二人の挨拶が終わるのを待つていたかのようにして身を返し、部屋を出ようとした。その拍子に天井から吊り下げられていた洗濯吊りに野地の頭が当たり、ガチャガチャと音を立てた。

「えへへ……。またやっちゃつた」

野地ははにかみ、頭を掻いた。池端もその笑顔につられるように笑った。佐々木も口を手をやり、笑いを堪えているようだった。

座が和んだ。「今、お茶を入れますので少しお待ちください」

「そう言いながら佐々木は池端に椅子を勧めた。」

「恐縮です」という言葉を背に受けながら、佐々木は部屋を出た。すぐにガラガラというガラス戸の音がした。そして、蛇口から水が出る音が聞こえて来た。どうやら、隣室は厨房室になっているようであった。

部屋の中を観察する間もなく、佐々木はお盆を持って部屋に戻って来た。盆の上には急須と湯飲み茶わんが乗っていた。どうやら温水器からの湯のようであった。

「池端先生、園が今日の最後の訪問先でしたね。それでしたら、少しゆっくりしていただくさい」

家庭訪問期間は七日間、この日は五日目であった。六軒の訪問を終え、疲れがピークに達していた。喉も乾き、何か飲み物が欲しかった。仕事の内容は多少違いがあったとしても池端には佐々木も同業者に思え、一般家庭の訪問とは違い緊張感は少なかった。

池端の顔くすみの見て、佐々木の顔はほころんでいた。佐々木にしても光男のことばかりでなく、小学校の様子など知りたいことがたくさんあったのだろう。

「うちの園の子どものなかには、現物のお米やキュウリを知らない子もいるんですよ。それは学校の先生に指摘されて分かったことなんです。極端な子になりますと、二歳から施設暮らしということもありますから。そういう子たちは、台所というものを知らないで育つて来るわけです。」

「ですから、食べ物はいつも調理済みの物にしか接していないわけです。炊いたご飯、刻んだキュウリを知っていても、その前の米やキュウリの姿を知らないということになるわけですよ」

佐々木はお茶を入れながら、問はず語りをした。

「当然知っていることと思っけていても、知らなかったり、間違っけて覚えていたりすることがあるということですね」

「そうです。これも笑えない話ですが」

佐々木は池端の話を受けて更に話を続けた。園では食事時、いつもお湯を入れたやかんをテーブルに置いておいてお湯を飲むという。子どもたちは「やかんを取って」と言うのが習慣になっていた。

ある時、小学校の先生から連絡があった。子どもが「お湯のことをやかんと間違えて覚えてる」というのであった。園では、指摘されて初めてその事実を知り、その後「やかんとお湯の違い」を改めて指導しているという。

「子どもは生活の中で言葉を習得していくということを実感しました。一度身についていた言葉、また習慣はなかなか変

えられませんか。それだけに正しい言葉遣い、生活習慣の定着は大事と思っています。特に園の子どもたちは、自らの責任でないにも関わらずハンディを背負わされています。いわれなき差別を受けることもありませぬので」

佐々木の表情に翳りが走ったように池端には見えた。

「あらっ、いけない。大切なことを聞かなければいけませんね」

佐々木の表情はよく変化する。頬を赤く染めて舌をちらりと出した。

「私ね、口先女と渾名がついているんですよ」

そういうと佐々木は笑った。こぼれた歯が白く健康的だった。

「ところで成績の方はどうですか」

池端も説明をしなければならぬ質問内容であった。ただ、佐々木は笑顔の後に話すのはややためらいがあった。

光男は学習能力の点では他児と遜色はなかった。しかし、学習の積み重ねに欠けていた。

例えば国語の漢字取得率がそうだ。六、七割ほどは読めるのだが書くという段になるとほとんどできなかった。また、二年生で学習済みである掛け算九九も、二と五の段以外はまだ不十分であった。両親の離婚、二、三回に及ぶ転校、父親とだけの生活などで精神的に不安定な日々であったろう。また、家庭学習どころではない事情もあったと推

測される。学習の遅れは、光男の責任とは言えないのである。そのことは佐々木も知っていることだろう。それを冒頭から話すのは避けた方がよいと、池端は判断した。

「図工と体育はすばらしい能力を發揮していますよ」

池端の言うことは単なるお世辞でなかった。色も十分に揃っていない絵の具から、光男は必要な色彩を作り出していた。色彩ばかりではなかった。構図も三年生の子どものとは思えないものを描いていた。

子どもたちを四つのグループに分け、それぞれベニヤ板に宇宙船が月面着陸した光景を彩色した卵の殻を張り付けて、絵を完成させるという授業をやったことがあった。光男の班は、ロケットが宇宙空間を飛んでいる場面であった。光男は、ロケットの先端三分の一ほどを画面から飛び出させ、下の空間に地球を描いた。その地球はロケットより小さかった。小学三年生ぐらいで全体像を描かないという芸当はなかなかできない。彼はそれをやすやすとやってのけた。

光男たちの卵の殻の絵は、四枚の絵の中で一番の迫力を示した。宇宙船の大きさは随一であった。何といっても、宇宙船が宇宙を飛んでいるという実感と迫力を見る者に与えずにはおれなかった。言うまでもなく、それは池端の感想でもあった。だから、彼の佐々木に対する説明は、具体

的で説得力があった。

佐々木はここにこしながら、池端の話に何度も頷いていた。

「先生がおっしゃるとおり、あの子は確かに絵の才能がありますよ。折り込み広告の余白にもひよいとスケッチなどしてしまふんですよ。猫でも犬でも自分が気に入ったものをですね。それが本当に生き生きしているの。光男を見ていると、和尚さんによって本堂の柱に縛られた雪舟が涙で描いたネズミがまるで生きていたようだったという逸話は、かくやと思われませう」

子どもへの評価が指導する者同士で一致しているということは、お互いにうれしいことであった。と同時に、互いの親近感を増す役目も果たした。

佐々木の光男に対する評価は、褒めすぎのきらいもあつたが、池端は少しぐらいオーバーに褒めるぐらいがちやうどよいのかとも思つた。

「実は私には子どもが一人おりまして、三歳の娘です。今の佐々木先生の言葉の習得と環境の関連については、私の育児についても大変参考になりました」

「まあ、先生、もう結婚されていらつしやるのですか。お若く見えますのでまだかなと思ひました。残念ですわ」

そう言うと、佐々木はまた笑つた。反対に池端はどきりとなつた。

「実は私も施設で育つたんですよ」

笑いの消えた顔で佐々木は淡々と話した。

池端は佐々木の言葉に驚かされた。初対面の者に話すべき内容ではないと思つた。なぜそんなことを言つたのかといぶかしく思つた。

後に判明することであつたが、それは彼女の子どもたちへ注ぐ情熱の証であつた。年齢以上に痛みや苦しみ、孤独を知る子どもたちへは「嘘をつかず正直に、平等に、明るく接する」ことが何よりも大切であることを短い経験から彼女は学んでいたのであつた。

養護施設は児童福祉法第四十一条に基づいて、乳児（二歳未満）を除く十八歳までの児童で、親の疾病や失踪、離婚あるいは死亡などにより保護者を失つた児童、虐待されている児童、環境上養護を必要とする児童の家庭に代わる場である。親代わりである職員とともに生活を営み、生活指導を受けている。そして、保育ならびに小・中・高校へ通学している。（注2）

青志学園には現在、七十五名の幼児、学童がおり、十五人の指導員、保母が世話をしている。規定では、学童六人に職員一人、幼児（三歳以上）四人に職員一人、三歳未満児は二人に職員一人となつてゐるが、実際は人手が足りず、一人の保母が九人の学童をみている状態である。

国から最低基準の保障があるものの、それは文字通りの最低で、基本的な衣食住を満たすだけのものに過ぎない。不足分は県からの援助、共同募金の受配、一般からの寄付などで賄つているがやはり足りない。結局、人件費を削らざるを得ないのである。

人件費を削るということは、実質賃金をカットするか、一人の保母が担当する子どもの数を基準より多くすることである。いずれにしる保母の負担は増えるのである。

施設によって勤務態様は異なる。青志学園では保母の勤務時間は起床から登校するまで、帰園してから就寝するまでとなつてゐる。そして、通算で八時間勤務となつてゐるところが実際は異なる。病気で学校を休む子もいれば、早退してくる子もいる。夏休み、冬休み、春休みもある。学校が休みということは保母たちの仕事が増えるということである。このような事情を加味せずとも、通常の勤務時間が十一時間ほどになるという。こういう仕事であるということとは、ほとんどの者は就職以前から承知しているといふ。しかし、現実には直面した時、これほどの激務とは思わなかつたという。理解できる話である。また、待遇は公務員に準ずるとなつてゐても、退職金制度、年金制度にしても不備の一語に尽きるともいふ。（注2）

養護施設ばかりでなく、多くの福祉施設は、また教育界もそこに働く職員の犠牲的精神とボランティア的熱意、そ

して使命感に支えられているというのが現状なのである。

入園してくる子どもたちの家庭実態を見ると、家庭崩壊のタイプが多い。未だ養護施設を孤児園と見る人がいることから分かるように、養護施設には戦後処理の時代があつた。戦争による孤児の収容である。しかし、現在、孤児はほとんどないという。入園してくる主な理由は、一番多いのが母親の病氣入院によるもの、二番目が母親の外出・行方不明によるもの、三番目が両親の離婚である。父子家庭が圧倒的に多い。この実情から母親に何らかの支障が発生すると家庭崩壊に繋がるということが判明する。家庭に占める母親の存在が、そして母親への依拠がいかに大きいかも明らかである。また、核家族化した家庭というものの脆さをも表しているといつてもよいかもしれない。ちよつとした躰で家庭というかけがえのない場が霧散してしまう。また、愛情に包まれて成長すべき子がその恩恵を受けずに育つてしまう。家庭という容れ物が極端に小さくなつてしまつてゐるのである。そういう意味で考えると、現在、施設に世話になる子どもたちが増加傾向にあると言える。

光男は半月ほど前、中学一年生の男子と一緒に施設を抜け出したという。

「夕食時、点呼したら二人がいなことに気づきました。それまでは確かに園の中にいたはずなのですが。いわゆる脱走は一年前にもありました。しかし、その後は落ち着い

て暮らしており、安心しております」

佐々木の話は池端には初耳であった。しかし、園ではこの類のことは珍しくないという。「脱走しても子どもたちはほとんど悪さをしないのです。何日もさ迷った挙句、止むを得ず食べ物や盗むことぐらいいです。この脱走する子たちの大半は、母子家庭の子に多いのです。母親恋しさに園を抜け出すんでしょうね。いじらしいですわ。ですから、駅に連絡しますと、大概はすぐに見つかってしまおうのです。何しろお金は持っていませんからどうしても無賃乗車になります。光男たちもこの伝ですぐに見つかってしまいましたよ」

光男は同室の子が母親からそつと贈られた筆記セットを見て無性にほしくなり、そのことから父親に会いたくなくなってしまったのだという。

「ここでは親を訪ねて三千里という言葉が絵空事じゃありませんよ」

佐々木の表情にはしみじみとしたものが浮かんでいた。

施設では個人所有というものは限定されている。当然と言えば当然なことである。無用な欲望、欲求を起させると災いの元となる。このような制約が強いためか、自分の持ち物に対する執着というのには信じられないほどに強いのだという。持ち物ばかりでなく、食欲も信じられないほど強いという。園ではできるだけ食事の量は確保するように

努めているが、限られた予算の中では種類も量も一定の制約を受けざるを得ないのである。

「光男の食欲は学校でも旺盛ですよ。とにかくお代わりはクラスの中でもいの一歩です。時には満月のような腹を見せることがありますよ」

池端の口調には悪気はなかった。

「みつともないですねえ。まだ頑是ない子どもですから許してやってください」

「いやいや、むしろ残るのがもつたいないです。全部カラにして給食室に返しますと、調理員さん方も喜んでくださるんですよ」

池端は満腹で笑顔の光男を思い浮かべ思わず笑みが出た。「学校や私に何か要望とか注意してほしいことはございせんか」

池端の問いに佐々木は天井に目をやって考えている風であった。そして意を決したような口調で話し出した。

「園の子たちを特別視しないでいただきたいのです」

「と言いますと」

「悪いことをした時に園の子だからと言って許すとか手加減をすることはほしくないでほしいのです。例えば体操着や筆記用具などを忘れても大目に見ないでほしいのです。他の子たちと同様に扱ってほしいのです。先程もお話ししましたように、常識的な生活習慣が身についていない子がいま

す。ちよつときつい言い方になります。優しさと甘やかしは違うと思うんです。本当の優しさは時には鬼にもなつて良い生活習慣、社会のルールを身に付けさせることだと思えます。このような事を申し上げるのは釈迦に説法と思えますが、ご理解ください。また、家の仕事調べとか両親を題材にした作文を書かせることについては十分な配慮をお願いします。なんだか注文ばかりになって申し訳ございません。これも子どもたちの幸せ、健全な成長のためです」

佐々木の話はもつともなことであった。池端自身も家庭を題材にした授業や父母をテーマにした作文や話題には注意してきたつもりであった。しかし、お米や丸ごとのキウウリを知らないといのは初耳であった。これは何も園の子たちだけの問題ではなく、全ての子どもたちに関わることである。このことを知っただけでも訪問の意義があつたように池端には思えた。

光男の部屋を見せてもらうことにした。

スチール製の机が三台壁に向かって並んでいる。一番手前の机の引き出しから答案用紙らしきものはみだたままであった。ドアを開けたすぐ側のところにタンスがある。かなり年代物という感じで多少のゆがみが見られた。机の背後と窓際に二段ベッドがそれぞれ置いてある。

「子どもたちの家具はこれだけです」

「つつましいものだ」と池端は胸を打たれた。子どもによつては物心のついたときより園を出る時までずっとこういう生活環境で過ごすのである。建物自体の古さのせいなのか、あるいは明かりの少なさなのか、いつか暮色が部屋の中に立ち込んでいた。急に天井や壁がせり出して来たようで身が押し込まれそうな圧迫感を池端は感じた。

だが、机や壁に貼られた流行のアニメーションやタレントの少女写真を見ると、他の子どもたちと変わらないことを痛感する池端であった。

「特別視してはほしくない」は、佐々木の言葉だった。それは、障がいや背負った子や家庭環境に恵まれない中で暮らす子どもたちに携わる人々に共通の願いであろう。

だが、簡単なようでこれはなかなかむずかしい。悪意のある差別は一瞥して差別と分かる。しかし、善意や憐れみのオブラートを被った差別というのはたちが悪い。また、差別用語などは全く意識しないで使用していることもある。差別は長い歴史を持つている。それだけに社会全体でこの問題に取り組んでいく必要がある。「鉄は熱いうちに打て」という。幼児教育も含め、早い段階から差別の問題を学習する機会を提供していくのは大切である。池端は改めてそのことを認識した。

洗濯場では、中学生とおぼしき子が、洗濯機を回しているた。

「園では、年齢が上がるにつれ、子どもたちの仕事が増えていきます」

佐々木の言葉に池端は「なるほど」と納得した。自立が早まざるを得ない子どもたちにとって、それは親心でもあるのだろう。

園の子どもたちにとって、進学も大きな課題になっているという。学習支援のボランティアの人たちがいるのだが、なかなか学力が向上しない。このことは池端も十分に承知していることである。佐々木保母の言葉によれば、出生時からハンディを背負って育った子の学力は低下傾向にあるという。この学力の遅れは、なかなか取り戻せないのだ。

高校進学は毎年一人か二人ほどで、現在も公立高校、私立高校に各一名ずつしか通っていないという。進学できない大半は、就職するという。彼らの多くは帰るべき家がない。それだけに園が実家になる。お盆休みや正月休みで園に帰って来る子どもも相当数いるという。これらの世話も職員の間にかかってくるのである。

「家族と食事するのは月に一回か二回くらいですよ。職員には正月休みなんてないも同然です。しかし、私は家族のない独り身ですから、他の職員とは事情が違いますけど」

その話から、池端は、佐々木が既婚者の職員の代わりに休日出勤も辞さない、ということを決めかしているかと理解した。

つっていた子どもたちも、部活で遅い中学生の子たちも帰って来たからなのだろう。廊下ですれ違うどの子も池端に挨拶する。彼も大きな声で返した。彼らからエネルギーをもらったような気分になった。

青志学園の学童の日課は六時半に起床し、清掃と続く。その後朝食が七時から始まる。学童の食事は別棟の食堂で摂る。幼児たちは部屋ごとに保母さんが食事の世話をする。少しでも家庭の雰囲気を感じさせようという配慮からである。午後からの日課は六時に清掃、夕食が六時半から、その後入浴である。しかし、入浴は週三回である。七時から学習時間になっている。小学生は九時、中学生は九時半が就寝時刻である。

この他にもいろいろな行事が組まれている。ハイキング、運動会、夏季キャンプ、もちつき大会、クリスマス会、耐寒登山などである。一般家庭より余程多い。

月行事にはおこづかい日、作業清掃日、誕生会、避難訓練などがある。

こづかいは中学三年生で千五百円、学年が下がるとに百元減る。小学生は八百円、幼児は四百円、高校生は三千円である。

子どもたちにとってこづかいは楽しい日である。いろいろ計画もあるだろうし、何に使うかを考えることも楽しい。何よりも現金を手にすることがうれしいのだ。

養護施設の仕事には外部の人間には窺い知れない苦労がたくさんあるに違いない。人を育てる仕事には数字では表されない規則を超えた情や使命観などの複雑な要素も含まれている。池端はそのことを佐々木や野地から教えられた。「ずいぶん長居してしまいました。今日はお二人の先生からたくさんのご意見をいただきました。勉強になりました。ありがとうございます」ところで光男くんは「そろそろ食事の時間ですから準備のため食堂の方へ集まっています」と思っています

佐々木の言葉に池端は、

「あれっ、もう五時半になっているんですね」と、腕時計を見ながら驚きの声を上げた。

「でも、まだ一時間程しか経っていませんよ。私も池端先生とお話しできてとても有益でした。こちらこそありがとうございます」

佐々木はそう言うとうつと頭を下げた。ぱらりとわかれた後ろ髪の間うなじが白かった。池端はとっさに目を逸らした。

頭を上げた佐々木は「光男を呼びましょうか」と、池端の顔を覗くようにして言うて来た。

しかし、池端はそれを押し止め「もうそろそろ失礼せねば」と言いながら腰を上げた。

池端が訪ねた時にはなんとなく閑散としていた舎内も、今は人の温もりが伝わって来るような気がした。遊びに行

この他に、年に何回か外食の日というのがある。予算に限りがあるので何回も実施できないが、部屋ごとに保母さんと一緒に近くのレストランへ出向くのである。

この時の子どもたちの喜びの表情つたらない。見ている方の胸が詰まるほどであると、佐々木は話をしながら目をしばたかさせた。一般の家庭の子にとってさえレストランでの食事は楽しいものである。ましてや年に数えるほどしか行かれないレストランでの食事は、一番のよろこびごとであることは、容易に想像できる。

歩きながら話す佐々木の言葉には実感がこもっていた。池端にしても、学園がこれほど子どもたちの心に寄り添って行事や日々の生活を考えることに感心してしまった。また、常に子どもたちへ愛情を注ぐような計らいも見られ、感銘を受けた。池端は「爪の垢を煎じて飲」まなければという思いにも駆られてしまった。

事務室の戻る途中に幼児室がある。食事の終えた子どもたちが、廊下に飛び出している。もう全員がパジャマ姿である。部屋によつては、既に布団の敷かれて所もあった。

子ども用の小さめの布団である。ピンクの毛布が掛けてあった。五組が整然と並んである。学童棟に比べ明るく、華やいだ感じだ。部屋の時計は六時を過ぎていた。

保母さんと一緒にテレビを見ている集団があった。「こんばんは」と声を掛けると。一斉に池端の方に顔を向けて

きた。テレビを見ていて急に視線を変えたせいだろうか、焦点の合わないぼんやりとした目だった。

「学校の先生よ」

佐々木の声に、子どもたちの側にいた保母は、池端の方に身体を向けるとにっこりと応えた。

廊下で遊んでいる子どもたちは、池端を物珍しそうに眺めている。池端が声を掛ける。きよんとんとしている子もいるし、元気に返事をしてくる子もある。そんな子どもたちの反応が池端にはおもしろく感じられた。つい、娘を思い出してしまった。

ちようど野地が反対方向から向かって来た。その姿を目敏く見つけた子どもたちが「野地先生だ」と駆け寄り、すがりついた。野地は、その一人一人に声を掛け、頭を撫でた。

「池端先生、遅くまでご苦労さまでした」

野地は、足にすがりついた子どもを引きずるようにして池端に近づき、声を掛けて来た。

「返ってこちらこそ夕食時までお邪魔して申し訳ございませんでした」

「いやいや、今度またゆっくり遊びに来てください。ところでどうですか、この子どもたちかわいいでしょ」

野地は屈託がない。

「野地先生は人気がありますね」

あれから五年が経っている。光男は中学三年生になっているはずである。三年前に異動して以来、光男とも青志学園とも縁が切れてしまった。光男はまだ施設に預けられたままなのであるか。それとも父親と一緒に暮らしているのだろうか。真紀子の一件以来、池端は彼のことが気になっていたのであった。

池端は教頭に転出書類を提出し、校長の職印を捺印してもらった。その書類を再度確認しながら校庭に目をやった。校庭の三方を取り囲むように植樹されている桜の木々は葉が落ち、裸の枝がまるで錆びた鉄骨のように乾いた薄青い空に張り出していた。時折北風が年季の入った窓ガラスを鳴らした。風の中にも、風の向こうにも人生がある。人はその一生の中で、それを選択できない時期というものがある。その選択できない風の中の人生を、光男も真紀子も重荷にすることなく歩んでほしい。池端は祈る気持ちであった。

6

「生理がないの」

くぐもった声だった。

背中を向けて横になっっている妻に、池端は「えっ、何」と問い返そうとして、その言葉をそのまま飲み込んだ。

「歩み」の評価を終え、三日後には冬休みを迎えようとし

「女性にはからつきしですが、僕は子どもにはスーパーアイドルですよ」

「子どもは正直ですから。最高の先生ということを子どもたちが評価してくれているんですよ。私も見習わなくちゃ」

「えへへえ」

野地はそう笑いながら照れくさそうに頭をポリポリと掻いた。

「この子どもたちの中には三日前まで普通の家庭の子もだった子もいるんですよ。今の世の中、いつ施設の子になるかわからないんですよ」

そう言った野地の顔に笑顔はなかった。

野地には何気ない言葉だったかもしれない。しかし、池端にはぐさりと突き刺さって来た。池端の子どもたちにしても夫婦関係の破綻や夫婦及びどちらかが事故や疾病によって育児が不可能になることがいつ起こるかは分からない。盤石と疑いもしなかった家庭という存立は、実はきわめて不安定なものである。池端はぞつとしてしまった。

外へ出ると日中の暖かさが嘘のようで、秋口のような空気の冷たさであった。池端は思わず体をブルツと震わせた。緑に輝いていた木々は、今や黒々とした一群の塊になって迫って来た。(注3)

ていた。寒さは増して来た。まして、夜気は一段と厳しくなっていた。体温が夜具の中にじんわりと広がり、心地よく睡魔に身を委ねた矢先であった。池端は一瞬、脳に縛りがかかったようなショックを感じ、しばし沈黙してしまっ

た。

妻の生理の周期は結婚以来、三日と狂ったことがない。「一週間や十日遅れても・・・」などと言う言葉は、気休めにもならない。そのことは二人とも承知だった。「ない」ということは、それだけで十分な意味が込められていた。結婚前のことであつたが、中絶をしてしまったことがあつた。その折、淳子がどんなに心を痛め、呵責の念に悩まされたかを池端は克明に記憶している。勿論、池端とて同じように罪の意識にさい悩まされた。しかし、淳子の苦しみは池端の比でなかつたことは確かであつた。後悔は繰り返すまいと、その時二人は肝に銘じたはずであつた。池端は妻の暗い言葉を反芻した。痺れてしまった脳は何も返してはこなかつた。沈黙は続いた。

池端は己の責任をさも忘れたかのように妻の肉体の食欲さを呪った。また、憎んだ。そうすることにより決断の苦悩を延ばせるような気がした。しかし、それは錯覚に過ぎない。事態が少しでも解決する訳でもなかつた。

妻が何を待っているか池端には明々白々であつた。しかし、それを素直に、愛情を込めて語りかけられない池端の

最大の欠陥であり、人間性の欠如と言ってもよかった。

あの時確かに確認したはずだった。「大丈夫か」と。淳子は「ええ、大丈夫よ」と、答えたはずである。

しかし、今、燃えさかる火事場で「火元の確認をしたか」と、問うことは犯罪にも等しい愚行と言えよう。さすがに池端はその言葉を口にするにはできなかった。

池端は妻の背中を凝視した。妻の子宮の中に命が宿っているのだ。今、彼は妻と子の二人から迫られていることをはっきりと感じた。いつものように沈黙を通すことはできなかった。だが、と池端は思う。大見得を切つて「生んで」と言ってもその舌の根の乾く間もなく後悔が始まるに違いない。かといって「墮ろして」と、簡単に言えるものでもなかった。

吐き出そうとする溜息が闇の底に押しこめられるように身体が硬直しそうになっていった。身じろぎもせず同衾している二人の間のあるか無しの隙間それが途方もないほど深くて広い裂け目のように感じられた。

あの子が生まれていたら、そのことを思う度に池端は後悔の念に駆られ、詫びたい気持ちがあふれ、罪の重さにおののくのである。せんかたなし、と忘れられれば幸いなのだろうかそうも行かない。

まだ萌芽に過ぎなかった。男女の区別すら、ましてや名

前さえなかった。葬ることさえしなかった。その子を忘れた頃に、その子がまるで池端をお白州に引き出すかのように襲ってくる。その子の目は瞳がなく、白い目が落ち着きなく絶えず動き、焦点は定まらず、宙に浮いて池端に迫ってくる。しばらくすると、ぱつと跡形もなく消える。何の前触れもなしに、不意に襲ってくるのである。それは決まつて池端の眠れない夜に限っていた。

結婚する前のことだった。じりじりと迫る溶岩を座視するように、ただ手を拱いて時を過ごし、ぎりぎりのところで病院へ行つた。アパートの近くの古ぼけた産婦人科医院であった。

ついで行こうという池端を振り切つて、淳子は一人で医院に行つた。一人残された感のある池端は、不安と無事に帰ってくる願いとで落ち着きなく部屋で過ごしていた。しかし、じつとしていてもできなかった。池端は不安といらだちを紛らわそうと、一間きりの部屋をしゃにむになつて掃除をした。しかし、耳だけは鋭敏になつていた。階下の玄関の建て付けの悪いドアが、ギシギシと音を立てる度に、心臓がどきりとなつて手を休めた。

長い時間だった。冬の短い陽が落ちかけた頃、淳子は戻つて来た。抱き寄せようと伸ばした手をスルリと抜け、淳子は黙つたままコートを脱ぐと、ハンガーに掛けた。その時、プンと消毒の匂いが鼻をついた。池端は胸がぎゅつと

祈るだけであった。

「もういやよ」

突然淳子が声を上げた。必死の思いがこもっていたように池端には聞き取れた。

「強く抱きしめて」

そ言うと、淳子は夫の背中にすがりつき、パジャマの布地を両手で強く握りしめた。池端は「許された」という気持ちになり、ほつとした。そして、向き直ると淳子をそつと抱きしめた。淳子は夫の胸に顔を埋めた。涙を堪えた肩が波を打つように震えていた。

池端の淳子に対する負い目は時間とともに薄れ、結婚式を挙げた頃にはもうその痕痕すらなくなつたように見えた。それが生理がないということを知らされた時、不意に、あまりにも鮮明に、闇に葬つた子の記憶が蘇つて来たのである。

もしも、あの子が生まれていたとするならば、今の妊娠はなかったかもしれない。果たしてあの子は男の子だったのか女の子だったのかと、思つても詮無いことであるが、どうしても思わずにはいられないのである。

暗闇の中で、全体が不鮮明な嬰兒が近づいたり遠ざかりたりする。そして、突然口が現れ笑うのである。その笑いは音を立てているわけではない。だが、池端には聞こえるのである。耳を塞ぐ。しかし、その笑い声は外から聞こえ

締め付けられ、戦きが体の内を走つた。彼は彼女を正視できなかつた。彼は、彼女の胎内を刃物が確実に抉つたことを感じた。そして、うなだれて頭をなかなか上げることができなかつた。「ごめん」とつぶやくような声が彼女に届いたかどうかは定かではなかつたが、彼はそれを繰り返す気力もなかつた。

この時ほど言葉の空しさを感じたことはなかつた。むしろ、場合によっては言葉が傷を深めるということもあるということだ。「ごめん」という言葉の対象は淳子に対してなのか、それとも妊娠させたことなのか定かではない。その言葉を発した者と受け手に共通の理解が成立するのは難しいのではないか。それはその言葉の曖昧性にもある。しかし、その曖昧性が発信者には救いともなっている。受信者が発信者の意図を取り違えたとしてもそれは受信者の責任に帰することが可能であるからだ。女性から見たらそれは何の断罪も受けない男の無責任さ、身勝手さと嫌悪し、憎悪するだろう。だが、男にも勝手な言い分ながら、何の断罪も受けずに申し訳ないという負い目が存在することは確かなのだ。

池端にとつて医院から戻つた淳子は、腫れ物のような存在であつた。離れてじつと見守る他はなかつた。また、手負いの鹿しかのようでもあり、手折れた枝のようでもあつた。池端はまんじりともせずただ時の速く過ぎゆくのをじつと

て来るのではなく、池端の内耳の中にだけ響く笑いであった。その笑いはあざ笑いのようでもあり、憐れみの笑いようでもあり、さげすみの笑いのようでもあり、高笑いのようでもあった。時に我慢できなくなると池端は台所に立ち、清酒を瓶から口移しにガブガブと飲み込む。ただただ酔いをもたらすだけの手段である。胃の中がカツと熱くなる。そして心臓の音が早鐘のように鳴り出すのをじっと待つ。そのうちに全身が火照り、うまくすれば酔いのままに眠りに入れるのだ。

このような思いは誰かに話して解決を図るという性質のものではない。特に妻には絶対に漏らすことのできないものであった。妻こそ最大の犠牲者であり、最も痛みを受け、悔い悩む存在であるからである。そして、その傷のかさぶたは未だ剥がれずにあるのだから。

三人目を生むか生まないか、ということは何れほど難事ことではないはずなのである。両親が覚悟を持って決断すれば済むことであった。

このことは、局面に立たされるまでの池端の考えであり、淳子の考えでもあったはずである。しかし、今はどうなのであるか。二人ともまるで閉じた貝であった。結論が出ないのである。出ないというより出せないのである。二人とも結論は見えていたに違いない。命と生活を秤にはかけ

がら、結局妻に言わせようとしているのだ。淳子にはそう思えるのであった。

どんな返答にも淳子は従うつもりであった。だが、いつまでも沈黙している夫に淳子は苛立ち、怒りさえ募ってくるのであった。「生むか生まないかその決定権は男にはなく、女にあるのだ」。そんな声が身のうちに急に湧き起こってきた。

すると、今までの苛立ちや怒り、不満や弱気が消えていった。そして、急におかしさがこみ上げてきた。

「私ね、生むわ」

快活な声であった。その突然の明るい声に池端は一瞬ひるんでしまった。同時にいぶかしくも思った。次に何か手ひどいことが返ってくるのではないかと思ったのである。

「ねえ、いいでしょう」

珍しく甘えるような声であった。

池端はほっとした。周りの固い空気がほぐれていくようだった。

「そうか、そう決心してくれたんだね。ありがとう」

池端も明るい声で答えた。

「それだけ」

「それだけって」

「賛成という訳ではないのね」

「いや、そんなことはないよ。僕も賛成だよ。生むのが一

られないはずである。問題はどちらが先に口を切るかだということであった。ただ口を切った者が責任を負うことの怖さを知っているだけに、それができないのであった。しかし、ここは夫たる池端が先鞭をつけるべき時だったのである。心の中で淳子もそう願っていたはずであった。

淳子は身を固くしながら「結局、自分で判断を下さねばならないのね」と思うのだった。大事な局面になると夫はいつも逃げるか沈黙かである。卑怯な男だと思ふ。失踪騒ぎにしてもこの男の意志薄弱がもたらしたものであった。確かに家事のことはよくやってくれる。妻である自分にも十分に優しい。また、子どもたちの面倒もよくしてくれる。

だが、どこかもの足りない。自分の要求の度合いが高すぎるのか、それとも多すぎるのかと自問を幾度もした。しかし、何かという具体的なものは明白ではなかった。それがまた苛立たせた。しかし、はつきりしたのは、結婚相手の男という者は優しいだけでは十分ではないということであった。それなら離婚をしてしまえばよさそうなものであるけれど、それもまた決断がつかなかった。我慢をし、あるいは諦めさえすれば不満はさほどではないのである。

だが、と淳子は思う。ここは夫で、しかも父親になろうというものの断固たる決断が必要な場面ではないか。妻がそれを求めるのは酷というものであろうか。背中合わせでいながら、そして、答えを求めているのを十分に承知しな

番だよ」

「なんだか変ね。何か奥歯に物が挟まったような言い方ね。何かあるならはつきり言いなさいよ」

「心にひっかかる物なんて何もないよ。とにかく生むことには賛成だし、家族が増えるのは賑やかになっていいよ。僕も協力するから」

「本当ね、今まで以上に大変だけど大丈夫ね」

「ああ、大丈夫だよ。光太郎も五歳になるし、祐子は三年生になり、随分と役立ってくれるに違いないから」

「そうじゃなくて、あなたのことよ」

「俺のことだったら大丈夫、と言っているだろう。家事だって今まで以上に協力するよ。それに組合の分会長も降りるし、高学年の担任も希望しないから。家事は今まで以上にやれるのは間違いないよ」

「それを聞いて安心したわ」

淳子は手足を大きく伸ばし、枕を直すとおつという間にいびきをかき始めた。そのリズムカルな寝息に池端は胸を撫で下ろした。

救急車の音が近づき、そしてだんだんに遠ざかっていった。池端はその音を聞いているうちにいつしか眠りに落ちていった。

「あけましておめでとうございます。先生 おげんきですか。わたしはげんきです。いずみのしせつは 森にかこまれています。とてもくうきがおいしいです。よる 森のてんじように ほしがいっぱいかやいています。とてもきれいです。先生 またあいにきてください。さようなら」

真紀子からの年賀状であった。学園の指導員から住所を聞いたのだから。

池端は胸を衝かれた。和泉の凍てつく夜空の星を見上げて、真紀子の姿がありありと眼前に浮かんで来た。それにしてもと思う。見上げた瞳には涙はなく、寒さにも震えていないことを。

反面、池端は安心もした。はがきの文章は、一年生にしては出色の出来映えと感心したからである。短い文章でありながら研ぎ澄まされた感性と観察力、そしてそれらの感覚を表現する能力が見てとれたからである。物事を見つめる素直な心をそのまま文に表現するということは大人でも至難の業である。真紀子がそれをできているということは彼女の天性のものもあるが、気持ちの安定もあるからに違いないと池端は思った。家庭というものを失ったとしても、彼女なりに満たされた環境で過ごしているに違いない。そう思うと池端はほっとした。

それにしても、池端は思う。池端には真紀子の年齢に近い娘と息子がいる。にも関わらず真紀子のごとに拘泥し

過ぎるのではないかと思うのである。彼女の事情を斟酌したときに、憐憫の情を持つのは自然なことである。しかし、度が過ぎていてのではないかと自問してしまうのであった。もしかしてと思う。なくした「あの子」の魂を真紀子に有しているともいうのだろうか。それ故に池端は執拗とも言えるほどに真紀子の心情を気遣うのか。しかし、冷静に考えれば、このような超常現象などというものは余りにも荒唐無稽に過ぎる。

いずれにしても、真紀子が新しい環境に慣れ、まっすぐに育っている様子を窺えたのは池端にはうれしいことであった。恐らく、このまま順調にいけば自立心が育ち、逆境もプラスに転化して自分の人生を切り拓いていけるものと思つた。

共稼ぎ夫婦にとっては長期の休みはありがたい。特に冬休みは急な呼び出しなどもなく、休みの中で一番心休む休暇であった。その前に評価の仕事など年末の仕事は山積みであったが、新年を迎えることもあつて何か華やぐものがあった。大晦日には大掃除をして埃と穢れを落とし、行く年に感謝をする。その真夜中にはぐるりと場面が百八十度回転し、新しい衣装を着た元旦を迎え、祝う。極めてドラマチックであり、先人の知恵に心から敬意を表したくなる。この新年を気持ちよく迎えるために、池端は例年よりも

力を込めて大掃除に取り組んだ。ただし、淳子は妊娠しているので、無理をさせず池端が中心となってやろうと思つた。二人の子どもたちも喜んで手伝ってくれた。久しぶりに家事に精を出した池端は、まるで自分の体内も清浄になったような清々しい気分になった。

狭い玄関の靴箱の上に花を活けた花瓶を置くと、それだけで玄関は明るく、華やかになった。ちよつとした工夫で、家の雰囲気は変わるものだと、池端は改めて感じた。

「家庭の幸せとはこんな処にあるのか」

玄関のドアを開け、屋外に広がる畑地を見やりながら池端は呟いた。

居間の炬燵のテーブルの上には、近所のラーメン屋から届いた料理が並んでいた。子どもたちは、久しぶりのラーメンやチャーハンに大喜びであった。池端も台所から漂ってくる香りに胃の腑がキューとなった。池端は妻と向かい合わせに座ると久し振りに寛いだ気分になった。

「おい、春休みになつたら旅行でもしようか」

ラーメンの半分ほどが胃の中に収まった頃、池端は突然言い出した。

「えっ、本当に。あなたからそんなことを言い出すなんて珍しいわね。一体どうしたって言うの」

淳子は顔を笑顔でくしゃとさせながら応えて来た。その言葉は弾んでいた。

「おめでたのこともあるし、家族にも何かと窮屈な思いをさせて来たからね。少しはみんなで楽しむのもいいかなと思つてね」

「それでどこにするの」

「一泊二日の行程だからあまり遠くにはいけないけど、やっぱり温泉地かね」

「それは大賛成よね。私もゆつくりと温泉に浸り、上げ膳据え膳で過ごしたいわ。ねえ、裕子に光太郎、おとうさんが温泉に連れて行ってくれるって」

母の声に「やったあ、ばんざい」と、真つ先に声を上げたのは裕子であった。それにつられるように光太郎も手を上げた。しかし、上げたのは左手で、右手には箸がしつかりと持たれていた。

「温泉地と言つたら、やはり山間の和泉か海の見える十馬か」

「あら、あなたいいの、十馬なんか候補に出して」

池端は妻に言われてはつとなつた。転落事故を起こし、妻にさんざん迷惑をかけ、苦渋の思いをした地である。池端にしても地団駄を踏むほどに後悔し、それを脳に深く刻み込んだはずである。それがきれいさっぱりと消えてしまっているのだ。ここでまた「うっかり」などと言おうものなら「気楽なものなのね」などと嫌みを言われかねない。嫌みならまだよいが、折角忘れてしまったことが蒸し返さ

れ、嫌悪な雰囲気になるのは池端にすれば願ひ下げであった。

「でももう三年も前のできごとよね。忘れるくらいがいいのよ」

淳子が意図してのことか、たまたま口を突いて出た言葉かは定かではなかったが、池端を救ったことになったのは確かであった。

「悪い思い出はさよならか」

「そうよ、いつまでもこだわっている必要はないわよ。私は十馬の奥には行ったことがないから是非行きたいわ。三月末と言ったら桜は満開だろうし、菜の花もきれいだっというわ。行こう、行こう」

「久しぶりに家族旅行だ。今から計画を立てて旅館の予約もしておこう。そういう交渉ごとは君の方が得意だろう。やっつてよ」

「ええ、いいわよ」

「ねえ、裕子に光太郎、旅行に行くのよ」

「えっ、旅行。どこよ、どこな」

裕子は満面で問い返して来た。

「十馬よ」

「とおうまってどこよ」

「ずうつと南の方、ここよりは暖かくて山がたくさんあって、海も側よ。桜の花も見られるよ」

「いつ行くの、おかあさん。明日」

「光太郎、明日はとても無理よ。これから旅館の予約をしなければならぬからね。それがきまったら行く日もはっきりするわ」

「光太郎、旅館に泊まるのよ。温泉にも入れるよ。大きいお風呂だから泳げるかも」

裕子は熱心に光太郎に説明している。光太郎は「泳げる」という言葉に大興奮であった。彼は小さいながらも水遊びが大好きだったからであった。そして、両手を上げ「やったあ」と叫んでいた。裕子もそれにたられ、やはり両手を上げ「わーい」と歓声を上げた。

「子どもたちがこんなに喜んでるのよ。心変わりなど絶対にしないでよ」

淳子は念を押すかのように、その言葉には力が込もっていた。

「旅館まで予約して途中で止めたなんて絶対に言うもんか。子どもたちを裏切れないよ」

池端も力を込めて言った。

「私も久しぶりに浮き浮きして来たわ。早速詳しい計画をつくらなきゃあ」

家族の喜ぶ様を見ているうちに、池端の心にも暖かい波紋が広がっていった。こんなにうれしがるのならもつと早くに計画するのだった、と後悔するのだった。

「さあ、今日はおとうさんにサーブスしなきゃあ」
淳子の声は生き生きしていた。
妻のこんな姿を見て、池端は今までの苛立ちや不満はなんだっただろうか、と思うのだった。諦め、突き放すのではなく、もつと妻の心に寄り添い、話を聞くべきだったのだと、改めて思うのだった。

久しぶりに家族が一体となって過ごした年末であった。大掃除も子どもは子どもなりに、妻は体調に合わせて一丸となつて大掃除に取り組んだ。終わった後に全員で畳の間で大の字になって喜びを共有した。自然、家の雰囲気も和やかになった。新年もその雰囲気は変わらなかった。子どもたちを叱ることもなかった。陽気も穏やかさが続いた。冬休みも後二日で終わろうとする六日のことであった。この日も朝からまぶしく太陽が輝いていた。遅い朝食を終え、掃除や片付けも一段落していた。池端は新聞を広げてゆっくりと文字を拾っていた。

「あなた、和泉学園というところから電話よ」

淳子が怪訝そうな表情をしながら夫に受話器を向けて来た。

「えっ、真紀子ちゃんが怪我されたのですか。いつですか」

池端は後ろからドンと突かれたような衝撃を感じた。言

葉もこわばっていた。真紀子が一昨日、交通事故に会い、重傷を負ったというのである。そんな非情なことがあるものかと、池端は天を仰ぐ思いだった。それは立っていた板子が突然抜け落ちたに等しいものだった。
「真紀子っていったいだれよ」
角のある言い方であった。

池端は少しの間、説明する気力が起きてこなかった。不幸の暗い光というものはどうしてこうも不幸な立場の者に集中するのだろうか、暗然たる気持ちになった。

淳子は、夫の急変した、何か魂を抜かれたような表情に不審を抱いた。それだけに、真紀子という女性の名前に何かいわくがあるような気がした。

真紀子がベッドの中で池端に会いたいと言っているのだという。電話番号は、学園の職員が池端の勤務先に問い合わせたのだという。

「どうしてあなたに会いたいと言っているのかしら」

淳子の疑問は当然であった。池端は以前、受け持ちの子どもと両親が諍いをし、挙げ句、夫が妻を殺害してしまつた事件のことは妻に話してあった。改めてその話をするのは気が重かった。しかし、気を取り直して話を始めた。真紀子とはその教え子であり、親族の誰もが引き取ることができず、十二月に養護施設に入所したばかりであることを説明した。

淳子は真紀子を成人の女性と誤解したようであった。説明を受け、すぐにその事件のことを思い出し、納得したようだった。しかし、そこで素直になれないのも淳子であった。幼児を成人女性と誤解し、嫉妬してしまったとは言えないのである。

「もう転校してしまつた子でしょう。それなのになんてあなたに会いたいと言うのかしら。あなた特別な事でもしたの」

聞きようによつては妻でも許せない言葉であった。

「特別な事は何もしていないよ。ただ身寄りがだれもおらず、淋しい思いをしていたのは事実だよ。交通事故に遭い生死の淵にいるというんだ。できることをしてやるのが務めじゃあないかと思うんだけど」

池端は自分の説明不足も妻の怒りの一因と思うと、できるだけ穏便な言い方をした。

「じゃあ、お見舞いに行くつていうの」

「そう、できたらそうしたい」

「私たちを置いて」

「しかたがないだろう。怪我人の見舞いに家族連れで行ける訳はないでしょう」

「だつてお正月よ、まだ」

「こんな非常時にお正月は関係ないでしょう。人の誠意の問題だよ」

至るのは十馬への「失踪事件」でしかない。淳子はその抱いた不審の念からまだ解き放たれていないのかもしれない。そう思うと、一概に妻を責める気持ちにはなれなかった。それにしても二人の仲は久し振りにしっくりいつていたはずだった。それがまた砂を噛むような生活に戻るのか、と思うとやるせない気分になるのだった。

池端にしてもそれほど外出したい気分ではなかった。長い休みで炬燵の温もりに慣れた身体は、むしろ離れるのを拒んでさえいた。しかし、「教え子の事故」と聞いた瞬間に、気持ちより身体の方が反応してしまつたのである。長い教員生活の習い性なのか、それとも真紀子への特別な思いの表出だったのかは定かではない。だが、池端はどんなことがあるうとも真紀子の見舞いに行こうと決意していた。「分かつたわ。あなたがそれほど行きたいのなら行ってきなさいよ。その代わり明るいうちに帰つて来てよ」

思いがけない展開であった。妻がこんなに簡単に妥協してくると思わなかつたのである。池端はほつとした。

「ありがとう。明るいうちにはきつと帰つてくるよ。和泉町だから所用時間は往復で三時間ほど、病院での滞在時間を入れても夕方四時頃には戻れるよ」

妻の「明るいうちに」という言葉にあの十馬事件を暗示しているよう池端には思えた。やはり一朝一夕には消せない深刻な問題だつたということを変更して知つた。

「あなたは他人のことになると、こんなに親切で行動的になるのね。見直したわ」

「そんな皮肉はやめてよ。立場を変えて君だつたらどうする」

淳子は池端の反撃に言葉を詰まらせた。

「そうだろう。君だつて教師だから、僕の言っていることは理解できるよね。学園の人が正月を承知でわざわざ電話をよこしたというのは余程のことだよ。それを妻が阻止するなんて理屈に合わないでしょう」

「そんな、邪魔をしている訳じゃないわ。ただ、折角の正月休みで、しかも休みはもうわずかしかないというのに、父親が家族を置いて出かけるのはどうかしら。それに正月休みで出かけたのは、近所の神社の初詣とレストランだけじゃないの。私はそれを言っているのよ」

「それは事実だから否定はしないよ。でも、こういうときは別だろう。いわば仕事の延長みたいなもんだから。君も教員なんだからその辺は分かるでしょう。気持ちよく出してくれよ」

どうしてこうもお互いの心が噛み合わないのだろうか、と池端は苦々しく思うのだった。落ち着いて考えてみれば口論をするほどの内容ではなかつたはずである。それを淳子は大きくとして捉えるのは、夫への何かしらの不信感が心のどこかにまだ潜んでいるのかもしれない。池端が思い

それにしても真紀子の怪我は一体どれほどのものであるのか、重傷と言うのであるからかなりの傷なのである。駅に急ぐ道すがら、池端はそのことを思うと気が気ではなかつた。詳しいことを聞かずに受話器を置いてしまつたことを今さらに悔やまれるのであつた。

付き添う家族とていない真紀子である。おそらくは園の保母さんか指導員の方が付き添っているのだろう。痛みに苦しむ真紀子の姿が目に見えなくなる池端であつた。

寒さのせいか、あるいは正月休みで工場の排煙や自動車の排気ガスが少ないせいかわ、広がる空は、薄いブルーの水彩絵の具を掃いたような美しさであつた。久し振りの外出に池端は開放感を覚えた。

駅のバスターミナルまで来ると、着いたばかりのバスからリュックを背負つた四、五人の小学低学年らしき子どもたちが勢いよく降りてきた。その後ろから軽装の母親たちが続いた。そのうちの一人が「車に気をつけて」と甲高い声を響かせた。

「冬休みの最後の思い出にこれから遊園地にもいくのだろう」と、池端は思った。そう思いながら自宅に置いてきた子どもたちに「申し訳ない」という思いに駆られた。

子どもたちは母親の心配などど吹く風とばかりに、われ先になつて駅舎めがけて走つていった。

駅のホームに降りると、先程の子どもたちが輪になつて

あきずにはしやぎ回っている。もう既に仕事始めになってはいたが、ラッシュ時間を過ぎていたせいか、電車を待つ人たちは意外と少なかった。池端は子どもたちの姿を見ながら「健康は何にも増して大事なことだ」と、痛感した。園にも転校先の学校にも慣れた真紀子が、事故に遭っていなかったのなら、この子どもたちのように笑い、飛び跳ね、声を出しておしゃべりをしていただろうにと、池端は真紀子を哀れに思った。

五分と待たないうちに和泉行き電車が入って来た。ラッシュ時のような慌ただしさもなく、池端はゆっくりと車内に入った。ドアの所に身を寄せた。そして、目的地の和泉病院の住所と電話番号を確かめるべく、コートのポケットから手帳を取り出した。途端に電車は動き出した。数秒もしないうちにまるでバケツの水をぶちまけられたように白い光が池端めがけワッと降りかかって来た。電車が暗い駅舎の中から明るい外へ出たからである。思わず池端は目を閉じた。閉じた目の中で光が凝縮し、そして、拡散した。その凝縮した白い光は、目の中でたちまち紅に変化した。その深紅の世界に浸るように、池端はしばらく目を閉じたままにした。

目を開けると電車は田園の中を走っていた。茶に青の混じった風景が横縞に後方へと走っていた。池端は、真紀子の以前の家がこの沿線にあったことを思い出した。もうそ

と階名を覚えてくれた。二階の二三号室であった。冷たい風に吹かれて来た池端には病院の暖房はやや暑すぎた。歩きながら、彼はのろのろとコートのボタンを外し、脱いで腕にかけた。

階段に足をかける度にコートのポケットの中の小銭が音を立てた。かすかな音で他の人には聞き取れないはずなのだが、池端にはその音が、廊下の天井まで響き渡るのではないか、という錯覚にとらわれた。そして、はっとなった。見舞いの品を何も持参してこなかったことに気づいたのである。しかし、今さらどうにもなるものではなかった。池端はコートのポケットをしつかりと押さえながら、二階まで一気に上りきった。上りきると、少し息が上がった。彼はしばし立ち止まり、息を整えた。荒い呼吸が鎮まったところで彼は、右へ行くべきか左へ行くべきか逡巡した。迷うまでもなかった。目の前の壁に案内表示が掲げてあった。二三号室は右の方角であった。廊下はひっそりとしていた。部屋の前に立った池端は、名札を確かめた。そこには、はっきりと真紀子の名が記されていた。「やはり真紀子の入院は事実であった」のだ。心の隅にあった「もしや」という思いは無残に崩れ去った。

ドアをノックしようとして、池端は一瞬ためらった。何か恐ろしい現実が待ち受けているような気がしたからであった。だが、手の方が自然に扉を叩いていた。その音は遠

こには新しい住人が生活を営んでいるに違いない。あれからまだわずかに二ヶ月余しか経っていない。一人の幼い女の子には奔流のような時間であったろう。そして、それは今も止むことなく続いているのである。

電車は七が宿駅に着くと、乗客の数はだいぶ減った。普段なら学生で混む路線なのだが、まだ冬期休業が終わっていないため、乗客の乗降が少ない。池端は座席に座った。電車は南進するにつれ乗客が減っていった。次第に起伏の富んだ地形に変わり、両側の山々が覆い被さるよう迫って来た。

8

温泉街の一面にある和泉病院を探し当ててまで二、三人の人に尋ね、尋ねた。ようやく探し当てた池端はふと立ち止まり、病院を見回した。二階建てのクリーム色のビルであった。明るい建物を目の前にして、池端はためらっているのである。彼は受話器を置いた時からここまでの間に異変が起こってはいやしないかと心配になってしまったのである。一種の脅迫観念かもしれない。温泉街の立て込んだ一画の、その病院だけが妙に静かなことも池端には気になっていた。普段表に出ない池端の小心さがそう思わせているのかもしれない。

受付で名前を述べ、患者名を尋ねると、すぐに部屋番号

慮めいて、かすかな音だった。池端は扉を押して中を窺った。そこには四つのベッドがあった。奥の窓際のベッドは一段低くなっていた。点滴用のビンが逆に吊り下げられ、管がベッドへと下りていた。そのベッドに横たわる小さな身体を見て、池端は真紀子に違いないと直感した。

付き添いと見られる女性が、丸い椅子に座っていた。大きなマスクを着けていたので年齢などは窺い知ることではできなかった。池端は歩み寄ると名乗った。「まあ、遠いところをわざわざお出でくださったんですね。まさかお出でくださるとは思いませんでした。私は和泉学園の保母の浜名と申します」

彼女はあわてて立ち上がり、いくども頭を下げた。池端は正直な女性であると思った。「真希ちゃん、池端先生よ」

真紀子の下半身を覆う布団は円状に膨らんでいた。点滴の管は右腕に繋がっていた。表情は青ざめていたが、包帯などは巻かれておらず、平生のままであった。池端は意外な気がした。もつと仰々しい状態なのかと予想していたからである。

池端は浜名の言葉にベッドに寄っていった。そして、傍らにあった椅子にコートを置くと、薄い掛け布団から出ていた左手の甲にそっと手を添えた。外の冷たさをそのまま

持つてきたような池端の掌には、真紀子の手の温みは熱く感じられた。真紀子の呼吸は速く、苦しそうであった。

「先生、痛いよう。痛いよう」

突然真紀子は唸るように声を上げた。

池端は、真紀子が外からの声にしっかりと反応していることに安心をした。しかし、目を開けることなく、強く瞑ったままなのは痛みによるものだと思うと、言葉がなかった。

「池端先生がね、真希ちゃんを元気づけるために遠いところから来てくださったのよ。真希ちゃん、負けちゃいけないよ。がんばるのよ」

「池端先生、痛いよう、痛いよう。助けて」

真紀子は痛みを訴えることで応えて来た。叫ぶこと、訴えることしか今の彼女にはなす術はないのだ。そう思うと、池端はいたたまれない思いでいっぱいになった。彼は、真紀子の手の甲に置いた手で、彼女の手を包んでやった。骨を感じさせる小さな、細い手であった。池端は心の中で「がんばれ、がんばれ」と真紀子に叫んだ。その声が己の手を通し、真紀子の手、そして心に届くことを願った。今までの彼の人生でこれほどの熱い願いはなかった。それほど彼は必死だった。

池端のその思いが通じたのであろうか、握っている彼の手に、真紀子の手の動きが感じられたのである。

「真希ちゃん、きつと、きつと治るからがんばるんだよ。先生も一生懸命応援するからね」

池端は流れ落ちる涙に声をくぐもらせながら真紀子に呼びかけた。

真紀子はうなずいているように見えた。

「実は、事故当日の一昨日が峠と言われたんです。しかし、担当の先生が驚くほどの回復力で、何とか持ち直したんですよ。そして、今日の午後、集中治療室からこの一般病棟に移ったばかりなのです」

「そんなにひどかったんですか。でも真希ちゃんはよくがんばりましたね」

池端は身動きもままならず、土気色をしてベッドに横たわる真紀子をまじまじと見つめた。孤児とも言える境遇の真紀子を神は見捨てなかったのだ。池端は強くそう思った。彼が真紀子から自分の手をそっと離れた。真紀子の指が池端の手を惜しむかのようにかすかに動いた。

「私たちがどんなに一生懸命看病したとしても肉親には勝てないんですよ」

浜名が顔を曇らせながら言ったその後であった。

「おかあさん、おかあさん。助けてえ」

絞り出すような悲痛な声であった。思わず池端は顔を上げ、浜名に目を遣った。浜名も池端を見つめて来た。二人から同時に「ふう」という溜息が漏れた。浜名のその表情

は実に悲しそうであった。悲しみで顔をゆがめ、その瞳から涙がこぼれ落ちていた。

「やつぱりおかあさんなのね。さつきも呼んでいたんですよ。私は胸が詰まってなんと返事してよいか分かりませんでした。真希ちゃんの生命力を信じるしかないのです。幸いです」

「大人が何人いても何もしてあげられない。実にいまましい」

浜名は池端の言葉に頷きながらマスクを取った。そして、テッシュで涙を拭いた。マスクの姿よりずっと若く見えた。二十代半かと思われる女性であった。

この部屋には真紀子の他に三人の患者がた。回復期かそれに近い症状の患者ばかりだという。部屋の空気がなく、真紀子はやむを得ずこの部屋になったのだという。

真紀子が事故に遭ったのは、園から子ども用の足で十分ほどの商店街にある本屋の前であった。この本屋は、緩やかな下り坂がちょうど終わる三叉路のところにあった。真紀子はショウウインドウに展示されていた童話を眺めていた。そこへ突然車が突っ込んできたのである。車に突き飛ばされた真紀子は、仰向けに路上に倒れこみ、そこへ車が乗り上げたのである。真紀子は完全に車の下敷きになってしまったのである。運転していたのは二十歳そこそこの男性であった。まだ免許取り立てで、日陰になっていた路上

の残雪にハンドルを取られ、歩道に乗り上げてしまったのである。男は恐怖のあまり、車から出て来ようとしなかった。恐らく出て来られなかったのだろう。事故の周りにいた人々や大きな衝突音を聞きつけて飛び出してきた商店の人々たちがすぐに車の周りに集まった。そして、総がかりで車の前輪の方を持ち上げ、下敷きの真紀子を引きずり出した。すぐに救急車要請の電話がかけられた。不幸中の幸いと言うべきか、車の左前輪は、真紀子の両足の間に収まったのだ。もしこれが足の上とか腹部の上を襲ったなら最悪の事態となっていたかもしれなかったのである。

真紀子は和泉病院の緊急外来に搬送された。真紀子に幸いが続いた。外科専門の院長が当直で在院していたことであつた。すぐに院長の執刀の下に緊急手術が行われた。右大腿部付け根から膝上までの約三十センチの裂傷、左大腿部にも十センチ余、右脇腹にも同様な創傷だった。どうやら膀胱破裂やその他の内臓の損傷は免れたらしい。また、奇跡的に頭部の怪我はなかったという。しかし、若干の血尿が見られるのが懸念材料と言えば懸念材料であるという。

院長は「切り傷は日柄の問題だから」と園長たちを慰めてくれ、そして「この子は強運の持ち主」と、励ましてくれたのだ。

池端は、浜名から事故の状況、傷の様子を聞いているうちに背中がざわざわとして来、顔が青ざめていくのを感じ

た。そして「死ななくて本当によかった」と、しみじみと思った。

「ひどい傷を負いながら不思議に出血が少なかったんですよ。大腿部には大動脈も走っていますからね。もし、この動脈が破れたら即死していたかもしれないのです。傷の浅かったのが幸いでした。その代わりと言いますと不謹慎になるかもしれませんが、穿いていたズボンはまるでぼろきれみたくでした。ズボンが真紀子の足代わりになったのかも知れません」

意識があっただけでなく真紀子の気丈さもあって、自分が園の子だということを周りに知らせたのである。そのお陰もあり、知らせを受けた園の職員たちは現場にすっ飛んで来た。まだ救助隊の隊員が真紀子を助け起こし、止血をしている最中だった。

車内で縮み上がっていた青年は、職員たちに引きずりだされた。わなわなと震え、顔面蒼白の青年は、ろくに話もできない有様であった。

「年もいかないのにでかい車なんか動かしやがって」

見物人の中からそんな罵声も飛んで来た。

「私だって腹の中が煮えくり返るくらいでしたよ。カーブの道を、しかも凍った上をスピードも落とさず曲がるなんて、土台無茶なんですよ。しかも、若葉マークと来てるでしょう。車がどんなに性能がよくても運転技術が未熟だった

浜名の「ありがたい」という言葉には万感の思いが込められているよう池端には聞こえた。

「浜名さんもずうっと付きつきりでさぞお疲れでしょう」「付き添いは三時間ごとに三人交代でやっています。午前九時から午後六時までです。もちろん異状があった場合はこの限りではありませんが、こんな風に容体が上向いて来るのを見ると、疲れは吹き飛んでしまいますよ」

池端は浜名の言ったことがよく理解できた。疲労には肉体と精神の二種類がある。精神的疲労は特に環境に影響を受けやすい。もちろん、この環境には人間も含まれる。感情の動物でもある人間は、その感情によって絶えず対象となる人間に影響を与える。真紀子の鎮静した状態、落ち着きを取り戻した表情が浜名に、そして、池端に安堵感をもたらしたのである。

池端は、真紀子に視線をやる振りをしてちらりと腕時計に目をやった。二時二十分ごろであった。病院に着いてから一時間ほど経過していた。浜名の先程の話からすれば看病の交代時間は三時のはずだ。妻との約束もあった。池端は暇乞いの時刻だと思った。

「私たちが看病していて一番つらいのは真紀子が『おかあさん』と呼ぶときです。彼女が一番必要なおかあさんがいくら呼んでも姿を現してくれないのですから。私も女性として『母親は早くに死んではいけない』とつくづく思いま

たら事故するのは当然ですよ。身の程知らずの見本みたいなもんですよ。真紀子がかわいそうでなりません」

浜名は実に悔しそうであった。
「後で真紀子が必要で言ったと思います。『お兄さんをあんまりいじめないで』ですって。重傷を負って痛みを苦しんで、しかも、事故のショックにあったはずでしょう。そんな子が加害者の青年を庇うのですよ。なんていい子だろうと、泣けてしまいましたよ」

「こんなにしっかりした子だなんて、私が担任をしていた時には思いもみませんでしたよ。短い期間に同じ世代の子たちの何倍もの悲しみや苦しみの体験が、彼女に人を思いやるという優れた心情形成に働いたんですね」

「私もそう思います。場合によっては内向的な性格になってしまったり、逆に攻撃的になってしまいう場合もありますから。真紀子は持って生まれた優しさが壊れずに、むしろよりよくなったということですね。ありがたいことです」

浜名はそう言いながら真紀子の掛布団を整えた。真紀子はいっしょか眠りに落ちていた。瞑っていたまつ毛が意外に長かった。呼吸は速くはなく、乱れてもいなかった。頬に心なしか赤みが差しているように池端には見えた。

「安定してきましたね」

「そうですね。先生がいらつしやる前に比べたら随分と安定しています。ありがたいです」

す

浜名の言葉に、池端は浮かしかけた腰を思わず落としてしまった。池端にも似たような経験がある。今までかなりの子どもたちを担当してきたが、その子どもにも何か起こった時に呼ぶのは「おかあさん」である。母子との接触時間が長いから当然と言ってしまう身も蓋もない。しかし、長さだけでは理解できない両者の繋がりとというものがあるような気がするのだ。

「私も真紀子があんなにひどい傷を負っていたとは想像できませんでした。真紀子とは短い期間の関りでした。しかし、何か切れない関りがあるような気がしてならないのです。今日、見舞いに伺ってほっとしているんです。会えたことの満足感、そして傷は重いけど命には別状ないことでの安心感です」

「池端先生には申し訳なかったのですが、連絡を差し上げました。ご存じのようにあの子の身寄りみんな遠いところでしょう。一番関りのある方と言えば先生しか思い浮かばなかったんです。それに、真紀子が日頃から慕っていた、何よりも、先生のお名前をうわごとのように呼んでいたものから。ご迷惑かと思ったのですが、万一のことも考えてご連絡を差し上げたのです」

「迷惑なんてとんでもありません。私の方から感謝したいくらいですよ。真紀子に会えて本当にうれしく、また、安

心しました。随分と長居をしてみました。真紀子が眠っている間に失礼します。目が覚めたら必ずまた来ることをお伝えください」、

池端は立ち上がると、浜名に深々と礼をした。池端は、浜名が真紀子に対し深い愛情をもって接してくれていることを知ったからであった。

9

外へ出ると、頬を打つ風が痛いほどであった。ホテルや土産店はまぶしいほどの明かりが点つていた。たった一時間ほどで風景は一変していた。まるで異境の地に降り立ったような錯覚に陥ってしまった。目を足元に落とすと、夕闇がひたひたと地から押し寄せて来た。回りの山々が黒々と押し包むように迫っていた。到着した頃には頭上の空は広々と広がって見えた。しかし、今は縮こまり、まるでマンホールの蓋ほどにしか見えなくなっていた。そして、その空間だけが未だ昼間の余韻を未練がましく残していた。しかし、そのツククサの花の色のような薄い青色は、明日の希望を暗示しているように池端には見えた。

バスを待つ道の向かい側は急な崖になっており、葉を落とした木々の間から川の瀬が見える。その黒い流れが岩に当たり白い波が立ち、清らかな瀬音が耳に届く。池端は心が洗われるような思いがし、またその瀬音が、真紀子の快

方を暗示しているような気がした。

生い茂る木々間の間から車のエンジン音が微かに聞こえて来た。池端はコートの襟を立て、視線を上の方に移した。次第にその音は高くなった。それは明らかにディーゼルエンジン特有の軽快な音であった。曲がりくねった坂道を下ってくるそのバスの排気音が、まるで巨大な生き物の呼吸のようだった。バスの中は空いており、池端は運転手のすぐ後ろの座席に腰を下ろした。ほっとした。やはり、病室では緊張をしていたようだった。目を瞑った。

「他人には優しい人」と、妻が言った言葉が突然池端の脳裏に浮かんで来た。妻が本当に言いたかったのは、池端が「家族には冷たい」もしくは「家族から浮いている」ということかもしれない。しかし、池端は彼なりに家族のために家事もこなし、育児にも心を、そして労力も使っている。それでも不満なものと、池端は叫びたい気持ちであった。そんな状況が長いこと続いてきた。最近、池端が気づいたのは、それは「ようやく」という副詞を着けてなのだが、妻の欲していることは「夫婦間の会話」だということだったのだ。それも、お互いが納得のいくまで話し合うということである。池端は、異論が嫌いな訳ではなかった。むしろ好むところであった。しかし、職場で議論し、家庭でも議論をするということは正直、免こうむりたい心境であった。そこには「言わなくても分かっただけ」という

池端の古い感覚と「何事でも包み隠さず話し合う」という淳子の夫婦観との食い違いが存在していたのである。この

ような齟齬は、続く結婚生活の中で少しずつ沈殿し、二人の間の隔たりを次第に広げて来たのかもしれない。ここま

手に声をかけた。

土産を買う前に妻に電話をしよう、池端は公衆電話を探した。受話器を取り、プッシュボタンを押す。呼び出し音が鳴り、すぐに妻が応答してきた。

「今、帰りの電車に乗るところ、予定より少し遅くなりそう。ごめん」

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。あなた本当に大変だったのね。出がけに気分を害するようなことを言っごめんなさいね。それで真希ちゃんの具合は」

二人の夫婦関係が、もし、このままであるとすれば、沈殿する激は時間の経過とともに増え続け、固まる。そして、いざれ悲劇的な結末を迎えるに違いない。その手前で危険性を察知できたのである。その恩恵は、まさに今、病床で呻吟している真紀子もたらしてくれたのである。もつとさかのぼれば、真紀子の両親がその死を賭して池端に教示してくれたのかもしれない。ここまで随分と遠い道だと思っ

妻の言葉に池端は一瞬胸が詰まった。そして、熱いものが込み上げて来た。妻が理解してくれたのだ。理解し合うことがどれほどお互いの心をゆさぶるのかをつくづく知った。

「子どもたちも私も待つてますからね。気を付けて帰って来てよ」

バスは、灯が点され真昼のように明るい商店街をゆつくりと走っていく。シーズンのせい、街は買い物をする観光客であふれていた。正月ということもあってか、家族連れが多いようだった。誰もが楽しそうに、笑顔で会話をしている。池端は、家族が揃って家族であると言うことを改めて感じた。彼は、子どもたちそれぞれと妻に土産を買って帰ろうと思った。バスはターミナルに着いた。多く

その後の言葉は涙に消えていった。

黒いアスファルトの地面に足を着くと、白いものがふわわりと膝あたりに落ちて来た。はっと思い、空を見上げた。夕闇と街の明かりの境界からその白いものがいくつもいくつも舞い降りて来た。池端は思わず体を固くして黒い天空を見つめた。闇から光の世界に出た途端に姿を現す白い雪

もない乗客たちが急ぎ降車を始めた。池端は、最後の乗客としてゆつくりと降りた。降り際に「お疲れ様」と、運転

は、やはり止めどもなく降り注いで来た。その降り注ぐ雪

を見つめている池端の回りから音が消えていった。無音の、そして今や漆黒と化した天に、忽然として真紀子の顔が浮かんだのである。驚き、佇立する池端に、真紀子の白い、透き通るような顔がにこりと笑いかけてきた。

思わず池端は「よかった」と、声を出した。その途端、真紀子の顔は掻き消えてしまった。

白い雪はますますその勢いを増し、街を覆い始めた。街灯、ネオン、車の前照灯、尾灯など全ての明かりが青く、赤く、黄色く、白く滲んで、まちまちの円形を形尽くつていく。池端にはそれが異次元の光のようにも、幻想にも見えるのだった。池端はその光の向こうに家族が談笑している光景が見えた。その安らぎの場まであと少しだ、と思うと、歩む足が軽くなっていった。

(注1)

この小説は、同人誌『藝文』（平成十三年 廃刊）一二三号、一二六号、一三〇〜一三二号に「蜃気楼」と題し掲載されたものを大幅に修正し、再掲したものです。

(注1)

JAF（日本自動車連盟の略称）は、ロードサービスや会員優待サービスを行っている団体です。

(注2)

児童福祉法は平成九年六月に改正し、「養護施設を児童養護施設」に変更しました。小説の時代背景は昭和五十七年前後ですので、旧法の呼称で標記しております。

(注3)

養護施設の実態についても昭和五十七年当時のことで、現在の状況とは異なっています。